



# 目 考

鈴 木 壽

## まえがき

幕藩体制（幕府と諸藩との組合せによる封建国家の体制）の権力は『集中統一された武士階級の武力に基づくものである』とし、その権力の本質は『武力本来の性質（力づくで相手を圧倒する性質）に基づく強制力』にあり、その権力行使の形態は『武力に基づく警察政治』にあるとみなし、『監察と嚴罰を建て前とする警察政治』は『強制される立場からいえば恐怖政治である』、それは『究極には、死の恐怖を前提とした』、というのが伊東多三郎氏の見解である（改訂「幕藩体制」清水弘文堂版）。

幕藩政治の特質が、右のごとく、集中統一された武士階級の武力に基づく警察政治にあるとすれば、幕府ないし諸藩における目付政治は、いわばその同義語ともいうべきものであろう。行政と司法の未分離を原則とする幕藩政治においては、それは家臣団統制や領民支配をも含めた幕藩政治全般にわたって貫徹することになる。

しかし、小稿の対象とするところは、そうした広義の目付政治ではなく、大目付―目付―徒目付―小人目付などの体系をもつ幕藩政治そのものの監察機構としての、狭義の目付政治に関わるものである。すぐれてそれは、家臣団自

体に関わる分野であり、その政治監察ないし家臣団統制を主任務としている。以下、これを目付制と仮称することに  
する。ただし、この目付制は戦時には軍監となるのであるが、ここではふれない。

ところで、このような意味における幕府の目付制については、その実態が一応解明されており、典拠史料も少なく  
ない。藩の場合は、幕府のそれに準じた制度が多いが、その仕法の解明は幕府のそれに比して立遅れがみえる。た  
だし、これらの成果はおおむね幕藩ともに目付制の一般的解明にとどまっており、大目付・目付などを勤仕した家史料  
に拠った目付制の個別的・具体的研究成果は、管見によれば、稀少のようである。

小稿では、一つの藩（信州松代藩）の目付史料（史料館蔵、真田家中依田家文書）に拠って、その目付制の輪廓を素描  
し、併せて目付史料の紹介をおこない、藩目付制の研究に若干の素材提示をおこなおうとするのである。目付制は藩  
政の枢機に、監察的分野から関与するが故に、それらの史料は、藩政の動向なり性格をうかがいうる点で、単に司法  
的史料としてのみならず、広く政治史的ないし政治思想的史料として重要な地位を占めるものと思われる。とりわ  
け、それは藩政の重大事件の際に鋭角的に顕われる。

本稿の構成は、まず松代藩士依田家について目付役を中心に系譜的概観をおこない、ついで、松代藩の目付制につ  
いてその機構と機能を素描し、最後に、目付役勤仕の一事例として、嘉永六年ペルリ来航時に激発する松代藩政の派  
閥抗争——佐久間修理（象山）一件及び仮養子一件に関する目付調書を紹介する。なお、目付役勤仕の他の諸事例な  
いし其他の問題については、別稿にゆずる。（以下、特註以外の引用史料は依田家文書に拠る）。

## 一 目付役依田家

まず、信州松代藩で目付役を勤仕したことのある藩士依田家についてみることにする。

依田家の略系譜を、「依田氏家系」及び職務辞令類に拠り、役職中心に系図化せば、次のとおりである。これによると、依田家の祖は柏木采女祐といい、中興の祖を依田又兵衛という。

○依田家略系

祖  
柏木采女祐

中興祖  
依田又兵衛

慶安三  
萬治三  
生  
卒  
高百石拝領

(源八郎)  
甚五左衛門  
(?)生

元禄五卒

政之進  
(?)生

元文五卒

(縫之進)  
忠英  
元禄十二生

享保五番入  
享保十六目付  
御金奉行  
安永八卒

(清左衛門)  
忠興  
延享三生

宝曆十三番入  
文政一卒

(縫殿進)  
忠貞  
明和八生

宝曆二御金奉行  
寛政九卒  
(五月十九日)

(左衛門)  
利貞  
安永二生

寛政十番入  
文政三御納戸投  
天保十二卒

(甚兵衛)  
忠順  
文化九生

天保九一代一人扶持  
加給  
弘化四目付  
役付足輕五人  
元治一太田陣屋勤番  
慶応二卒

(源之丞)  
利繼  
文政八生

嘉永六番入  
安政四目付  
安政五役料玄米三  
人扶持  
役付足輕五  
元治一學校懸術教  
授方助御供  
慶応二卒

(忠之進)  
政之進  
利美  
弘化二生

明治三四年卒  
明治十生  
昭和八卒

又兵衛の生年は不詳、歿年は万治三年となっており、慶安三年八月十五日附で、初代真田信之から左記のごとく高百石の知行朱印状をうけている。

為扶助百石之地

宛行訖金可領

納者也如件

慶安三年

(朱印)

八月十五日信之



依田又兵衛殿

中興初代の又兵衛、二代甚五右衛門、三代政之進の役職は、何れも不詳であるが、四代忠英（縫之進）は左記のごとく、享保十六年九月二十三日附で目付役に任ぜられている。（外に番入、御金奉行なども勤仕しているので、参考に史料を附載する。）

依田縫之進

御目付役被

仰付之

享保十六年亥

九月廿三日

依田縫之進

小幡助市組江御番入

被仰付之

享保五年子ノ（異筆）  
十月朔日

依田縫之進

御金奉行被

仰付之

三月廿八日

五代忠興、六代忠貞、七代利貞の三時代に目付役を勤仕したかどうか、史料を欠くので不詳であるが、八代忠順（甚兵衛 又兵衛）及び九代利継（源之丞）時代には目付役などを勤仕している。そこで、次に依田甚兵衛忠順時代の目付辞令関係の史料を示すことにする。

まず、旧知安塔家督相続仰付及びその御礼進上とみられる折紙を掲げると次のとおりである。

依田左右衛門

同 甚兵衛

左右衛門病氣不相勝往々

御奉公難相勤付願之通

隠居悴甚兵衛江只今迄

拝領之御知行百石被下置

家督無相違被

仰付之

（文政九戌年）  
十一月十一日

目付考（鈴木）

進上

御太刀

一腰

御馬 代銀老枚

一匹

以上

依田甚兵衛

忠順

(裏書)

表書之通槌請取

御納戸江相収申候以上

文政九戌年十二月十五日

徳嵩恒吉 ㊦

すなわち、父奎右衛門が病身のため隠居、悴甚兵衛に旧知百石安堵、家督相続仰付があり(文政九年十一月十一日、これに対する御礼進上物とみられる太刀一腰、馬一匹(代銀一枚)を藩主へ進上している(同年十二月十五日)。

つぎに、目付役勤仕の辞令などをあげると次のとおりである。すなわち、依田甚兵衛は弘化四年七月十八日附で目付役に任命され、同日、目付役附の足輕五人を藩から預かっている。目付の下僚として配属されたのである。なお、目付役料については、依田甚兵衛分の史料を欠くので依田源之丞の場合(役料玄米三人扶持)を代用して掲げる。

(表書、弘化四丁未年七月十八日)  
(被仰付)

依田甚兵衛

役替目付役

申付之

七月十八日

(表書、同前)

依田甚兵衛

御役附足輕

五人被成下

御預之

七月十八日

(表書、安政五戊午年三月)

依田源之丞

御役料玄米

三人御扶持

被下置之

三月廿二日

目付に任命された時には誓詞血判をするが、左記の史料はその時の家老の召状である。ただし、依田甚兵衛分を欠くので、依田源之丞の場合を代用して掲げる(安政五年三月二十二日付)。差出人の望月主水は家老である。また、依田源之丞が目付加役に任命された時のものを添載する(嘉永七年八月二十六日付)。なお、依田源之丞がこの目付加役を勤仕した時の本人の記録「御目付加役勤方日記」があり、誓詞血判の記述などもみえる。



(封書表書)

依田源之丞殿

(家老)

望月主水

明朝五時評定所江

罷出御役之誓詞

可有血判候以上

(安政五年午)

三月廿二日

(封書表書)

依田源之丞殿

(家老)

河原舍人

明朝五時評定所江

罷出御目付加役之

誓詞可有血判候

以上

(嘉永七年)

八月廿六日

なお、依田甚兵衛の代官辞令を参考までに附載すれば次のとおりである。

(表書、天保五甲午年  
七月廿五日被仰付)

依田甚兵衛

御代官被

仰付之

七月廿五日

以上は、目付役を中心とした依田家の系譜的概観である。これを要するに、依田家は近世初期は不詳であるが、又兵衛の時、慶安三年高百石の知行取となり、以後版籍奉還までその知行高は変わらない。なお、その知行所村附は、享保十六年（享保十六年、小物成井小役帳）より幕末（各年度「知行目録」までの間は、小森村（更級郡）三十石一斗九升二合、大熊村（高井郡）四十六石、小鍋村（水内郡）二十三石八斗八合である。これ以前も同様だったものと推測される（依田家知行所については、拙稿「藩士知行所の構造」史料館研究紀要1号参照）。依田家は代替りには旧知百石安堵、家督相続仰付があり、これに対して御礼進上がおこなわれている。依田家の役職は、史料の精粗などのため不詳な点もあるが、番入・御金奉行・「御納戸役」・代官・目付加役・目付がその主要な役職となっている。目付役就任は、享保期以前は史料を欠くので不詳であるが、これ以降は多くみられるので、一応依田家は目付的役柄としての特色を示しているとみられよう。特に化政期ころ以降の甚兵衛、源之丞兩時代の目付関係史料が比較的よく現存しているので、松代藩目付制のある程度の解明が可能である。

ここで、それらの史料の詳細にふれていられないが、目付関係を中心に依田家文書の主なものを要約すると、次のとおりである。

- (1) 依田氏家系、真田家譜
- (2) 知行朱印状、知行目録、職務辞令、進上物目録、拝領物目録、賞詞
- (3) 知行所收納規定、知行所收納帳類、家計出納帳類
- (4) 御条目留書、目付御条目、目付御小条目、評定所定、目付役向日記、目付役向留書、目付勤仕録、目付役向小絵図面、目付役向書状類、目付加役勤方日記、道中記、道中勤方、御巡見一件控類、幸教公御上洛御供日記、嘉

永六年佐久間修理一件（異国船渡来一件）書類、仮養子一件書類、元治元年佐久間修理一件書類

(5) 兵法・砲術・海防・武器・学芸関係書類

(6) その他

以上、総数約七百余冊、三千余通。右のうち目付役に直接関係ある史料は必ずしも多くはないが、特に(2)(4)が注目されよう。

## 二 松代藩の目付制

それでは、松代藩の目付制はどうか。

信州松代藩は、初期の四十年間には森長可をはじめ七領主の交替をみているが、元和八年真田氏の入封によって固定し、爾後真田氏の松代領知は廃藩に及んでいる。以下、小稿でいう松代藩とは真田氏松代藩を指称する。

真田氏松代藩の領知は拝領高十万石（初期には上州沼田三万石の飛地あり）、内高約十二万三千石。家臣団の総数は約千九百名、そのうち約二百五十名が地方知行の給付をうけ、残余は蔵米取である。地方知行の最高は千四百石（初期二千二百石）最低は五十石で、百石台の人数が五〇％を占めている。地方知行の総高は元文五年までは四〇％前後（約五万石）であったが、寛保元年からの半知借上政策の恒常化に伴い、実質的には二〇％前後（約二万五千石）となっている。これら地頭知行権は制限付年貢徴収権程度に規制されており、その他の行政・司法権はほとんど藩が一括行使している。したがって、藩の目付の職権も蔵入地、知行所を問わず、一元的・全領的に行使されるのである。

外様大名の松代藩真田氏は、初代信之より信政―幸道―信弘―信安―幸弘―幸専―幸貫―幸教と代を重ね、廃藩時の第十代幸民にいたったが、七代幸専（彦根藩主井伊直幸四男）、八代幸貫（前老中松平定信二男）、十代幸民（宇和島藩主伊

松代藩役人表(延享4年)

目付考(鈴木)

役職名	人数	(内、江戸詰)	役職名	人数	(内、江戸詰)
無役	3		御蔵奉行	1	
御家老	7	2	御飯米御代官	1	
御中老	—		御蠟燭漆御紙役	2	
御城代	2		水道役	—	
	4	1	御馬役	3	1
大目付	1		御茶道	5	3
御側番	1		御用部屋書役	8	2
廻番	1		御帳付	1	
御奏者	6	3	馬医	2	1
御留守居	2				
御使役	5	2	一番池田右大夫御番組	21	6
御守役	—		二番鈴木治部右エ門御番組	21	7
御側御納戸	4		三番十河喜兵衛御番組	22	6
御膳番	4		四番原民部御番組	23	5
御近習	27		五番矢野半左エ門御番組	20	2
御小姓	6		六番小幡權之助御番組	19	4
御次小姓	—		七番前島助之進御番組	24	7
職奉行	3		但馬守様御附人	4	
町奉行	2		御前様御附人	7	
郡奉行	2		豊松様御附	6	
御勘定吟味役	2		御部屋様御附	1	
御吟味役	4	2	御奥番	3	
宗門政(郷目付兼)	2		二丸元ノ役	1	
御普請奉行	5	1	豊三郎様御附人	7	
道橋奉行	2		お照様御附人	4	
御目付	8	2	久米之助様御附人	5	
御武具奉行	2		おハナ様附人	1	
廻金奉行	—		智岸院様御附	1	
御城廻(水道役兼)	2				
御医師	15	6	奥番	5	
御祐筆	7	4	家督	13	
御金奉行(御腰物兼)	5	2			
御納戸	3	1	計	379人	70人
御種借役(越石小物兼)	2				
御代官	8				
古未進元方御役 (御蔵奉行兼)	1				

達宗城二男）は何れも藩外からの養子嗣であり、特に幸専と幸貫を迎えたことによって、真田氏は譜代大名の列に準ぜられることになり、藩礎を固めるにいたった。幸貫が老中として幕政の天保改革に参劃したのもその現われである。ただし、明治維新の段階では勤王側に加担している。

まず、真田氏松代藩の目付制の位置づけをみるために、同藩の延享四年「御役人帳」（史料館真田家文書）に拠り、役人表を略示すれば右表のとおりである（下級属僚を除く）。すなわち、諸役人三七九人（内、江戸詰七〇人）のうち大目付一名、目付八名がおかれている。目付は八名のうち二名は江戸詰で、一名は御吟味方加役となっているので、右の三名を除いた五名が松代詰の目付の常置人員だったことになる（ただし、幕末には大目付二名の例がみられる）。氏名を示せば次のとおりである。大目付恩田氏は知行高二百石、目付は百石ないし百五十石の知行高である。

大目付 恩 田 織 部

目 付 松村 十左衛門 草間 元右衛門（定府） 安 藤 酉 平（江戸） 長谷川半右衛門

金井藤助（御吟味方加役） 奥村 新左衛門 佐久間三左衛門 常田 一郎右衛門

なお、目付加役が四名程度おかれているが、後述を参照されたい。

上記役人帳には下僚のため記載されていないが、他史料によれば、目付の属僚に徒目付——下目付がおかれている。その定員数は不詳。徒士目付は徒士級の目付であるが、下目付は足輕級の目付とみられる。「下目付二人、<sup>（相州、</sup>陣屋詰、足輕之内々人撰被申渡候」とあり、そのうち一人は「清之助組清治郎」であるとした史料がみえるのはこれを示すものであろう。なお、「御小人目付細野八兵衛」から目付依田源之丞宛の史料があるが、下目付の別称であるのか、特に御小人（仲間）の監察を担任する目付であるのか判然としない。幕府の場合は、徒目付の下に小人目付（特に御目見以下の監察を担当）、さらにその下に中間目付（特に中間の監察を担当）がある。また、松代藩では別に「調役」

（苗字なし）が目付宛に調査報告を提出している例がみえるが、これは下目付の下僚なのか、下目付らが調査に当たった場合を指称したものか不詳。これらについては後究にまづ。

なお、明和九年十一月「御役所御張紙」によれば「御目付役所江罷越、致難談等候由相聞候、此末右牀之者有之候ハ、名前可被申聞候」とあり、御目付役所の存在を示しており、また「御条目」所収、「御徒目付役所張紙」（享三）によつて、御徒目付役所の存在も知りうる。大目付役所、下目付役所については史料欠のため不詳。

以上を要約すれば、松代藩の目付制は、

大目付―目付―徒目付―下目付

という体系をなしていたことになる（この他に、小人目付、調役の名称がみえる）。定員数は大目付一―二人、目付八人であり、徒目付・下目付は不詳。目付は徒目付、下目付などを下僚として使い、さらに目付各一人当り、御役附足輕五人程度を役とし、役料として玄米三人扶持程度を給付されている。目付には御目付役所、徒目付には御徒目付役所がある。大目付は、幕府の大目付のごとく、儀礼中心の式部官的存在とみられ、目付のごとく活躍していない（後述）。なお、右の大目付―目付制度の他に、郡中横目、郷目付、台所目付など、各行政職に附置された目付類がおかれているが、上述のごとき狭義の目付制度としての大目付―目付制とは別系統のものとみられるので、ここではふれない。それでは、松代藩の目付制の職務内容は何か。

まず、較比のため幕府と若干の藩の目付制についてみておこう。

幕府の場合には、大目付（四―五〇）―目付（二四―一〇〇）―徒目付（約六〇）―小人目付（五〇）などの組織体系をもっている（人数は時代差あり）。大目付は老中支配で、大名・交替寄合・高家を監察し、その政務の得失を検断するを任務とし、併せて評定所式日出座を任とした。目付は若年寄支配で、旗本御家人を監察し、その政務の得失を

検断するを任務とし、併せて評定所式日出座を任とした。徒目付と小人目付はともに目付の配下にあつて、これを補助し、事務の實際を担当したが、小人目付は特に御目見以下を監察した。

ところで、これら職務の實體をみると、大目付は大名の身分格式及び城内での礼式を主掌するもので、旗本の栄職ではあるが、老後の閑職とみられていた。また、司法官的性格は稀薄で、その本質はむしろ式部官的なものであつた（大目付一人は道中奉行を兼務）。これに對して、目付は旗本御家人の身分の統制及び幕府諸役人の政務の監察糾弾を主掌するもので、捜査弾劾機関としては大目付に比して遙かに要職であつた。特に、配下の徒目付・小人目付を指揮して幕政および諸藩の施政の動向・事態を探索させる秘密警察の主役として活躍し、畏怖された。秘密捜査の結果は、直接老中に申達し、時には將軍に上申した。目付は身分は若年寄支配下にあつたが、職務上は將軍ないし老中に直屬していたのである。大目付、目付の城内での詰所を目付部屋という。（平松義郎「近世刑事訴訟法の研究」、松平太郎「江戸時代制度の研究、上巻」に拠る）。

藩の場合は、例えば、土佐藩では奉行（家老）配下に大目付―小目付―徒目付―横目があり（平尾道雄「土佐藩」、薩摩藩では表方家老配下に大目付―目付―徒目付―下目付などがあり（鹿児島県史第二巻）、米沢藩では奉行（家老）配下に大目付―御使番―目付―御徒目付があり（米沢市史）、また長州藩では藩主直屬の直目付と当職（家老）配下の目付―徒目付―横目がおかれており（防長回天史）、仙台藩では奉行（家老）直屬の近習目付と、奉行配下の若年寄（庶務担任）直屬の目付―徒目付―小人がおかれている（宮城県史2、近世史）。以上でみる限り、土佐・薩摩・米沢の諸藩においては、家老配下の目付制が、大目付を頂点としてほぼ類似の体系をなしている。松代藩の場合もこの型である。ただし、後述のごとく、右の場合でも、藩主が政務を直扱いする場合がある。これに對して、長州藩は藩主直屬の直目付、仙台藩は家老直屬の近習目付を特設して目付制の二重構造をとっており、この場合には大目付を欠いている。た

だし、特設以外の目付制の型は、土佐・薩摩・米沢藩などのそれと大同小異である。なお、仙台藩の場合の目付の任務内容を例示すれば、奉行（家老）直属の近習目付は「諫争の役也、且つ御政事の得失を論じ、諸役人の曲直を察す、且つ火災を防ぐ指揮を掌る」とあり、若年寄直属の目付は「御奉行所を始め諸役人の公私曲直を察し、且つ火災を防ぐの指揮、御行列の事務を掌る」とある（上掲、宮城県史）。

以上を通じてみて、幕府の場合が対大名・藩政関係を余分にもつ点は別として、幕藩の目付制には組織・機能などに類似性がみらるといえよう。むしろ、幕府のそれに準じた傾向が諸藩にみえるといった方がよさそうである。松代藩の場合も然りとする。なお、ここで特に注目を要するのは、幕府の大目付の任務内容ないし性格についてである。上掲、平松氏の明快に指摘された大目付の性格、つまり榮譽的・式部官的閑職であり、実権は目付にあったとする点は、諸藩の場合にもみられる傾向かと思われる。

さて、以上の幕府及び他藩の目付制を参考としながら、松代藩の目付制の職務内容についてみることにする。

大目付については、史料が稀少で解明は困難であるが、後述のごとく、嘉永六年佐久間修理一件（異国船渡来一件）のような藩政の重大事件の処理過程で、殆んど大目付が登場しない点は、幕府の大目付のような職務内容や性格をもっていたことの反証になるのではないかと思われる。大目付が評定所式日出座のことは後述のとおりである。また、大目付は対幕藩関係の文書の受達などを扱っている例がある。なお、某年八月、家老鎌原伊野右衛門が、御咎により「隠居之上蟄居被仰付之」の際、その罪状の一つに「大目付御目付印封書類、疎忽ニ開封致し候一条」云々とあるが、詳細不明。

目付の任務については基本的史料がある。ただし、これは天保・嘉永期以降の史料であるが、これ以前もこれと大差なかったかと推測される。以下に掲げる三点の史料は、目付の職務内容に関する藩の基本規定であり、これによつ



てその骨格を一応知ることができる。三点のうち、「御条目」(嘉永四年十月廿七日附)と「御小条目」(同年同月廿二日附)は、目付就任の際藩(家老)より目付に交付されるものであり、退役の際には藩へ返却される。例えば、目付依田甚兵衛は退役の際(嘉永年間か)「先御役之御小条目、御条目、并御役附足輕五人可有返上候」との藩の指示をうけている。もう一つの史料は評定所に関する規定で、「定」及び「評定所出座之覚」(天保十四年十一月付)である。

右の三史料によって松代藩における目付の主要任務が、(1)家臣団及び諸役人の政務に対する監察検断(百姓町人らの法令違反取締を含む)、(2)評定所式日出座、にあることが判然とする。しかし、これらの規定にはみえないが、後述のごとく、目付のもう一つの重要任務として、(3)用番家老「日記」の記帳及び布令の伝達がある。目付の職務は供番を始め多岐にわたるので、別稿を必要とするが、ここでは主要任務であるこの三件についてみていくことにしよう。

(A)「御条目」は全文九カ条より成る。目付の重要任務に属する家中侍及び諸役人の政務に対する監察検断事項をあげ、これに違背した者があった場合は、目付は早速に申達すべきことを規定したものである。

すなわち、第一条は家中侍(足輕、仲間、又者を含む)が諸法度に違背した場合、及び百姓町人等に対し不法法を働いた場合。第二条は家老及び諸役人が權威がましく奢、依帖最負、我儘を行なった場合。第三条は諸役人が役儀を油断し、依帖最負理不尽を行なった場合。第四条は町人百姓の困窮如何、役人・地頭・代官の非儀による百姓町人の迷惑の有無、分不相応の奢者の有無などある場合。第五条は家中侍で婚礼祝・衣類・振舞等に関する儉約令違反者、分不相応の奢者のある場合。第六条は供番、勤番で懈怠者ある場合。第七条は全家中のなかで、不法作者ある場合。第八条は普請方・勘定方・其外は、年寄共の差図次方立合い公平に吟味すべきであるとしている。第九条は家中上下によらず、男女好色猥、博奕をなす者がある場合。

以上、九カ条であるが、附りとして、何事によらず申達は早速に行なうべきこととしている。上記の「申達」先は

家老（御用番）とみられる。ただし、次の「御小条目」にみられるように、藩主直扱いの政務の場合は藩主へ申達したことになる。

#### 御条目

一家中侍不依高下、兼々申付候諸法度相背、并对百姓町人等、不作法成もの於有之ハ、可申達事  
附、足輕・仲間・又もの以下に至迄、可為同前事

一家老共并諸役人、威光をたて奢又者依帖最負我儘成もの、於有之ハ、早速可申達事

一 諸役人其役儀致油断、就万端、依帖最負理不尽之働、於有之者、是又有駄可申達事

一 町人百姓致困窮候哉、其役人、或ハ地頭・代官非儀成申付をもいたし、在々町人迄致迷惑候哉、或ハ其身不似合奢致候もの有之候哉、成程入念見出、及聞候趣可申達事

一 家中嫁娶・婿入之祝儀、又者衣類振舞等之儀申付候儉約に相背、不応分限奢たるもの於有之者、可申達事

一 供番并勤番致懈怠もの於有之者、可申達事

一 不依高下、又ものに至迄、不作法成もの及聞見出次第、可申達事

一 普譜方、惣而勘定方其外、不依何事、年寄共差図次第立合、少も依帖最負なく、可遂吟味事

一 男女好色猥、并博奕仕候ともがら、於有之者、不依上下、可申達事

附、不依何事、申達候儀、於有之者、早速可申達事

右条々嚴重可相守之者也

嘉永四辛亥年十月廿七日

（B）「御小条目」は、右の「御条目」がやや一般的規定であるのに対して、目付の職務を具体的・実務的に規定し

たものとみられる。全五カ条より成る。

第一条は包括的な規定事項として重要である。すなわち、此度目付に任命したから、国家(藩)のために第一とし、後聞儀なく入念に、油断なく勤めよ。万事申付けた法度、または今後申付けられる法度を守ってやれ。就中、今度申付けた九カ条目(上掲「御条目」とこの「御小条目」)は厳重に守ってやれ。隠密の儀は家老たちは勿論、近習の用人より申入れがあっても一切他言するな。藩主直扱いの政務については、上申したことを別段家老共へ話してはならぬ。もっとも、家老共より尋ねられた際は有躰に申述べよ。もし心得違いで、家老共へ話した上で藩主へ上申した場合、咎を申付ける。ただし、藩主幼少の間、家老共が政務を執行している場合は、万事家老共へ上申せよ。第二条は武家百姓町人の法度違背に関する規定。すなわち、家中の無役席・家老共をはじめ、平士、足輕・仲間・又者にいたるまで、及び百姓町人等にいたるまで、法度違反者はすべて急度上申せよ。第三条は目付仲間に関する規定で、これも注目される。すなわち、目付仲間間は用向を申合せよ。仲間間の上申したことについては、善惡共に共同責任がある。その外、仲間間の儀に一存があったら一人の判形で上申せよ。右の趣は他言一切無用。第四条は、威光を立て私の奢をしたり、又は仲の悪い者が自分の遺恨を以て藩主及び家老共へ悪口を申立てないことを規定。第五条は取持立と音物の禁止規定。すなわち、目付は家中侍、百姓町人及び江戸藩邸出入の諸職人・諸町人に頼まれて取持してはならぬ。もっとも町人・手代・組頭・足輕・百姓から、本人は勿論、妻子・附人等まで、音物を一切受けてはならない。

以上の五カ条である。右のうち特に注目されるのは第一条の規定である。つまり目付が藩法の遵守を前提とし、目付役用の「御条目」、「御小条目」の厳守を負荷されている点、及び隠密事項は家老共(近習用人を含む)といえども、これに他言を禁止されている点は当然のことであるが、さらに対藩主、対家老との関係が規定されている点は注目に値する。つまり、藩主が政務直扱いの場合と、然らざる場合とがあり、前者の場合は、隠密事項は勿論のこと、上申

事項を家老共に話すことを禁止されている点である。目付が藩主の直扱い事項について、家老へ申達の後には藩主へ上申した場合の罰則も附加されている。もっとも、藩主直扱い事項でも、藩主へ上申後において、家老から尋ねられた時は有駄に申述べよとあり、また藩主幼少のため家老が政務を処理している場合は、万事家老共へ申達せよ、と規定している。さらに、第三条も注目される規定である。つまり、申達は目付仲ケ間の用向協議、共同責任を本則としている点、及び時に、単独申達を認めている点である。ところで、このような規定も、その具体的限界が必ずしも明確とはいいがたく、また藩主と家老等との力関係で素乱の可能性を争んでいるように思われる。後述の「三、嘉永六年佐久間修理一件等史料―目付調書より―」などは、その具体的現われとみられるのである。

#### 御小条目

- 一 此度目付役申付候間、国家之爲第一ニ、聊以後閣儀不致、成程入念致、致油断間敷候、万事申付候法度相守、就中、今度申付候九ヶ条之条目、此小条目嚴重相守可申候、此以後、不依何事申付候法度、猶以違背仲間敷候、家老共之儀ハ不及申、近習之用人申渡候共、隱密之儀一切他言仕間敷候、当主自身政務筋承候時節ハ、申達候儀別段家老共江ハ申聞間敷候、尤家老共ハ尋候儀有之節ハ、有駄可申述候、若心得違ニ而家老共江申述候上ニ而、当主江申達候儀有之節ハ、咎可申付事

但、当主幼少之内、家老共政務承候節ハ、万事家老共江可申達候

- 一 家中無役席・家老共初、平士、不依高下、及足輕・仲間・又もの以下、并百姓町人等迄、於何事も、申付候法度之趣、内々ニ而茂破候者、有之候ハ、縦令、親子兄弟、親類縁者、又ハ知音之好身たり共、少も依怙蠱真なく、正路に急度可申達事

- 一 目付仲ケ間、用向可申合候、仲ケ間申達候儀、一統申合相談連判一味之儀ハ、善惡一同ニ可存候、其外仲ケ目付考（鈴木）

間之儀、一存ニ存込候儀ハ、一人之判形ニて可申達候、右之趣、他人ハ不及申、親子兄弟親類縁者たり共、一切他言仕間敷事

一 威光を立、私之奢いたし、又は中惡敷者之儀、自分之遺恨を以、当主并家老共江、惡様申立間敷事

一 家中之面々、并百姓町人、又ハ於江戸出入之諸職人・諸町人ニ被相頼、不依何事ニ取持立仕間敷候、尤親類縁者・由緒手寄有之候共、町人・手代・組頭・足輕・百姓方より、其方ハ不及申、妻子・附人等迄音物一切受用仕間敷事

右条々、嚴重可相守もの也

嘉永四辛亥年十月廿二日

(C) 「定」は評定所に関する規定で、全十九カ条より成る。評定所は家中及び百姓町人に対する重要な評議裁判を行なう所である。第一条の諸役人評定寄合日の規定をはじめ詳細な規定あるが、条文の解説は省略に従う。「評定所出座之覺」によれば、月二回(二日、一九日)の出座の者は家老、中老、大目付、寺社奉行、郡奉行、町奉行、目付であり、大目付・目付の出座が知られる。なお、支配所より諸公事訴がある時は役人が召連れて出座すべきことを指示しており、書役・勘定者も陪席している。なお、「評議」の史料も依田家文書に若干ある。

定

一 諸役人評定寄合

毎月 二日 六日 十一日 一九日 廿五日

此五ヶ日を定べし尤公用於有之者可為延引事

一 評定所寄合辰刻致出座、用事陰明次第可退散事

評定所江定之役人之外用なきもの一切不可致參入事

公事人介添者屯人若輩并病者之外可停止事

公事人訴訟等罷出候もの雖為直參之輩刀脇差帶すべからざる事

公事人雖為親類縁者、知音之好、於寄合場評定出座之者一切不可取持事

公事人在々より相詰候日數、先之次第可承候、尤当所公事人者其日之帳面次第先々より可承、但、不承候而不叶儀、又ハ急用者可為格別支

公事人ニ不審申かくる義其筋之役人発端申出之、勿論惣座中不審吟味可為同然事

公事裁判以後、其筋之役人裁断始末留書可致事

公事其日に落着無之者重而致詮儀其上ニ而不相濟義者年寄共方江令相談、沙汰を究へし猶以わけかたき子細有之者御書付可申上支

裏判并召状を受遲參之者其所之遠近を考へ日數を積り輕重ニより或ハ牢舎或可為過料事

公事訴訟其筋之役人方江訴候ハ、其品を承届無遲々評定所江可出事

雖為直參、諸公事之出入火附盜賊殺害之族、依其品其筋之役人方江訴之、於評定所可遂詮議、不及分分別義於右之者、家老共方江遂相談沙汰を究へし、難分子細有之者以書付可申上支

諸論出来之時、或親類縁者、或傍輩知音之族公事を取持方人仕候者、侍風下共曲事之至也、訴論双方公事之外名主組頭五人組店かりハ大屋証拠人、此外一切不可召出事

謀書謀判之科重をは死罪に行、輕をは可令牢舎、執筆人可為同罪事

奴婢養子之事、幼少々令發育者、縱其子成人後、何様之申合候共、養親之心に任すへし、但依其品、可裁断

之事

- 一 隱田之族者其身を可行死罪、若又會議之上年々を考、三倍可遂収納事
- 一 惣而領中猥之義於有之、家老共方ニ全相談、其筋之役人方々憲法に可申付事
- 一 訴訟候品、數年捨置、又者押置候類有之様に相聞候、向後ケ様之義無之様可相心得候、若延置候義訳有之候ハ、評定之節何茂江可申聞事

右条々不恐權威、不憚傍輩、嚴重可沙汰、若依怙偏頗之族有之者、出座之諸奉行可為為典事者也  
天保十四卯年十一月

評定所出座之覺

月中兩度

二日  
十九日

家老

中老

大目付

寺社奉行

郡奉行

町奉行

目付

右之外、從支配所、諸公事訴有之節ハ役人召連可罷出者也  
(天保十四年)

卯十一月

書 役

勘定者

別 紙

御用無之ともから一切出入可為無用者也

さて、以上の目付二条目及び評定所規定によって、目付の職務内容が法的に一応判然としたが、目付の職務分掌はどうか。松代藩の場合はこれについての法的史料を欠くので不詳であるが、幕府の場合が参考となる。つまり、幕府の目付の分掌は、座敷番、供番、評定所番、火之口番、名代番、学問所及医学館廻り、米廩及囚獄廻り、勘定奉行役宅立会、諸普請出来栄見分、があり、別に勝手係、日記係がある。外国係、海防係、大船製造係、開港係は幕末に創設。以上の外に、臨時の任務として町方係、殿中巡視、人足寄場掛がある（上掲、松平太郎著書）。

右の分掌のうち、座敷番から日記係までの分掌などは、松代藩の目付分掌職分範圍として類推されようか。

右の分掌のうち、日記係は特に重要な地位を占めるものといえよう。日記係は、「殿中日常の事件、その他を記録するもの」であるが、幕府の場合は、目付部屋坊主が実際の事務にあたつたとされているが、松代藩の場合は坊主不詳。何れにせよ、松代藩でも、目付が年番家老「日記」の日記係を日番制で担当し、藩政の主要事項、人事などを記帳したことは判然としている。すなわち、松代では五人の目付のうち当番（本役ともいう）一人宛が日番となり、これに四人の加役（目付加役）のうち一人宛が日番で補助する、というかたちをとっている。在府（江戸）目付の場合も、二人の目付のうち一人宛が日番で勤仕したものとみられる。

城下松代の場合を例示しよう。嘉永六年の御用番家老「日記」（史料館真田家文書）の十月を例にとってみると、一



日の初出の部分に担当者氏名が記載され、これに続いて当日の所要記事が記録されている。藩政の事件、人事などにわたる重要記事である。担当者氏名は次のとおり。

御用番 河原舍人

十月朔日

当番 斎藤友衛

加役 里見勘左衛門

つまり、河原は家老の御用番、斎藤は目付の当番、里見は加役（目付加役ともいう。目付の補助役）であり、何れも十月一日の当番となっているのである。ただし、家老の用番は月番、目付の当番は日番であり、加役も日番である。このようにして、毎日の記帳がおこなわれるのである。次の表は、右の嘉永六年「日記」から、家老用番は一カ年分を、目付当番・加役は十月分を表示したものである。つまり、家老用番は月番として一月の真田志摩から十二月の河原舍人まで各家老が勤仕している。この年の用番家老は四名出ているが、その勤仕回数は志摩四回、河原五回、石見二回、伊野右エ門一回で、不正型である（この年は佐久間修理一件等が起っている）。なお、江戸家老の場合は望月主水が一人で一カ年分を勤仕している。ただし、江戸家老は前掲、延享四年「松代藩役人帳」によれば定員二名であるが、嘉永四十六年ころは一名だった。これは、当時の藩の政情からでた特別措置である。当時、藩内で一名、二名の両論が対立し、一名に落着した経緯があるからである。

目付当番は十月中は斎藤、長谷川、宮島、禰津（刑）、禰津（繁）の五名が日番交代勤仕をしており、その勤仕順・回数はほぼ正型をなし、時に繰合勤仕があり、また途中で目付役替のため斎藤に代って大日向が入っている。なお、十月十五日に禰津（刑）、禰津（繁）、同二十九日に禰津繁人が「御用」の肩書で「当番」の前に列記されているが、これは特別の御用のための臨時的なものとみられる。

嘉永6年家老用番(月番)表

嘉永6年10月目付当番・目付加役(日番)表

目付考(鈴木)

月	家老用番(月番)
1	真田志摩
2	"
3	"
4	河原舍人
5	真田志摩人
6	河原舍人
7	"
8	鎌原石児
9	鎌原伊野右門
10	河原舍人
11	鎌原石見
12	河原舍人

月	江戸家老
1	望月主水
2	"
3	"
4	"
5	"
6	"
7	"
8	"
9	"
10	"
11	"
12	"

月	日	目付当番(日番)	目付加役(日番)
10	1	○新藤友衛	○里見勘左門
	2	○長谷川甚太夫	○飯島楠藏
	3	○宮島嘉織	○坂口又治
	4	○彌津刑左門	○島津隼見
	5	○彌津繁人	里見勘左門
	6	長谷川甚太夫	飯島楠藏
	7	宮島嘉織	坂口又治
	8	△大日方正司	島津隼見
	9	彌津刑左門	里見勘左門
	10	長谷川甚太夫	飯島楠藏
	11	彌津繁人	坂口又治
	12	宮島嘉織	島津隼見
	13	大日方正司	△近藤弥喜市
	14	長谷川甚太夫	飯島楠藏
	15	宮島嘉織	△森弘喜
	16	大日方正司	△大森莊兵衛
	17	長谷川甚太夫	近藤弥市
	18	宮島嘉織	飯島楠藏
	19	大日方正司	森弘喜
	20	長谷川甚太夫	大森莊兵衛
	21	宮島嘉織	近藤弥市
	22	大日向正司	飯島楠藏
	23	彌津刑左門	森弘喜
	24	彌津繁人	大森莊兵衛
	25	長谷川甚太夫	近藤弥市
	26	宮島嘉織	飯島楠藏
	27	大日方正司	森弘喜
	28	彌津刑左門	大森莊兵衛
	29	長谷川甚太夫	近藤弥市
	30	宮島嘉織	飯島楠藏

目付加役も目付当番とほぼ同様で、里見、飯島、坂口、島津の四名が日番交代で勤仕しており、その勤仕順・回数にはほぼ正型をなし、中途で加役の交替のため里見、坂口、島津に代って近藤、森、大森が入っている。

もっとも、年度ないし月度によっては、「加役」を欠き、「当番」のみの記載の場合もみられるが、これは記帳の際に略記されたものであろうか。なお、これらの日記の実際の記帳が、誰によって行なわれたか不詳だが、年間の筆蹟が同一である点からみて、目付の属僚によるものと推測されよう。

目付の用番家老「日記」の記帳勤仕については以上のとおりであるが、この他に、目付は布令の伝達などをもその主要職分としたものとみられる。

例えば、文久某年九月二十七日付で、鎌原伯耆死去に伴う三日間鳴物停止の布令が「御家老御連名」で「御目付中」宛に渡されており、「追啓」として、「常例触来候向井支配江も可被相触候」と記入されている。常例触来候向及支配の向へも触れよとあるところから、家老よりの布令は目付役經由としていることを示している。また、文久三年十二月二十六日付で、元治元年より明治元年迄の五カ年間儉約令が、家老望月帰一郎ら五名の連名で「御目付中」宛に渡されており、「追啓」は前掲史料と同文である。

事実、他の例でもみられるように、松代藩の目付役は多くの布令の伝達事務を処理している。目付の布令の伝達職務は幕府でもみられるが、諸藩の場合にも同様とみられる。

それでは文書の起草はどうか。監察という目付の日常専管事項について報告文書の作製などを行なうのは当然であるが、その他は家老などからの下令で評議事項の意見書起草などに及ぶ程度のものである。幕府の場合には、対大名関係のある故か、「諸局提出する所の願書、伺書、建議書等の文書は、老中・若年寄之を当番目付に下附し、目付部屋の評議に附せしむ（議案其種に従って或は大目付の参加を要すとせり）。事件の機密に亘るは其意見書概ね用所詰の徒目付

をして起草せしめ、添削の後捺印し、各下の者より順次廻覧に附し、全員異存なくば之に下札を附し、奥右筆役をして老中・若年寄に通過するを常規とせり。」としている(前掲、松平著書)。松代藩の場合は、対外的(対幕府、対藩)な文書については大目付の所掌だったものとみられるが、後究にまちたい。

以上によって、松代藩の目付の職務内容として、用番家老「日記」の記帳及び諸布令の伝達を主要任務の一つとしていたことを指摘できよう。

上記以外の目付の職務分掌とその実例については、なお別稿にゆずるが、ここでは若干例をあげるにとどめよう。

(イ) 藩主他行の際の警固供番。

(例) 文久二年四月二日領内の湯田中温泉へ藩主が湯治に出かけた際の「御湯治御行列」表によれば、御目付は一名、御徒目付一名が参列している。略式の行列とみられよう。

(ロ) 御荷物会所の荷物改。

(例) 文化十四年十二月「御荷物会所掟書」(全十三カ条)によれば、同会所で御用荷物・御家中寄荷を扱う際に、目付ないし徒目付の立会などを必要とする箇条が目付四カ条、徒目付二カ条ある。

(ハ) 役職任免立合。

(例) 嘉永六年十月八日付「無役席御家老、真田志摩」が「御家老職御免被仰付之」の際、目付が立合っている。

(史料館真田文書「日記」)。

(ニ) 訴状建札及び訴状箱の管理。

(例) 文政六末年伊勢町御用地建札を左の通り天保十四年認替、家老から目付に渡された。その文言は次のとお

り。

定

此訴状箱江御家中并百姓町人迄茂存寄次第書面姓名相記なけ入可申候姓名無之分ハ追而御焼捨ニ相成可申事

(文政六年)  
未十月

なお、徒目付の職務内容は、目付の下僚としてこれを補助することにあるが、具体的事例を示す史料は少ない。上掲史料で、荷物会所の荷改や藩主他行時の誓固の例が知られるが、次に掲げる「御徒目付役所張紙」(子三月)によって、御徒目付会所の存在及び同所での徒目付の任務内容の一端を知りうる。なお、徒目付は目付の下で案文の作製などを行なったものとみられるが不詳。下目付についても史料は少ない。徒目付とともに目付の属僚としてこれを補助することを任務としたので、幕府の小人目付のごとく「隠し目付」ないし「隠密」として活躍したものとみられる。目付への調査報告書などが依田家文書に若干ある。

御徒目付役所張紙

覚

- 一 御下り之義第一心懸、万更立入遂吟味更
- 一 朝六時罷出、職人日雇入改札引上出辻遅速改、御目付江可申達事、其上度々早出且遅出致し候ものハ名前可申聞更
- 一 立合之義無遅々可相勤、并早速立合請可申義を相延置候筋有之者、早速御目付江申達其上可申出事
- 一 御普請懸り合えもの、末々ニ至迄精不精之趣及見及聞候趣可申聞更、尤御目付江も可申達事

一 木切釘縄等其外遣方ニ付不益之義有之者、其向江可申達候、尤右躰之義ニ付、心懸宜、各別之義有之候者兩様共ニ御目付江も申達、其上可申聞事、惣而御張紙之趣相背候族有之哉、心懸是又可申聞候  
右之趣嚴重可相勤者也

子三月

### 三 嘉永六年佐久間修理一件等史料——目付調書より——

松代藩目付の事件処理の一事例として、嘉永六年に起った佐久間修理（象山）一件〔異国船渡来一件〕、及び仮養子一件をあげ、目付調書史料の紹介をすることにした。

嘉永六年六月三日、米艦浦賀来航を機として、松代藩に異状な事態が勃発した。この事件及び仮養子一件の経過については、既に「象山全集」（信濃教育会編）、「佐久間象山」（宮本仲）、「佐久間象山」（大平喜間多）、「松代町史」（同役場編）、「真田志摩」「誠齋紀実」などに簡略に述べられており、事件自体については特に新事実とはいえないが、その裏付けとなる原史料については殆んど知られていないといつてよいかと思う。

これらの事件について、当時、藩の目付が克明に当事関係者から一連の調書をとっており、また、目付の上申書なども提出されており、それらの控（写）が上述の依田家文書のなかに現存する。その大部分は未公開の新史料であり、かつこの一連の調書の内容が、当時の藩政の動向なり人物の明暗を活写している点で、また目付らの藩政の枢機に接触する役割などをうかがい知りうる点で、重要な史料とみられるので、煩をいとわず史料の紹介をおこなおうとするのである。これら事件は、後述のように松代藩の化政期ころからの派閥政争がこれを機会に激発したものであり、しかもそれが廃藩時まで持越される抗争だけに、特に注目されるのである。

當時の藩政の動向なり性格づけについては今後の課題であり、ここで詳述の暇はないが、要するにその経過は、第八代藩主幸貫（前老中松平定信二男、文政七年養子）が、佐久間象山（知行高百石）らを登用し、開明進取、殖産強兵（洋式、特に大砲製造演習、天保初期大砲七二門所有）政策をとり、幕政の天保改革にも老中として参画したが、洋式兵備強化等は進んだものの、新政策は必ずしも成功せず、財政的窮迫を招来した。これに対して、保守派の反対機運が高まり、嘉永四年五月、時の執政、家老恩田頼母とその一派（家老河原舎人、山寺常山、佐久間象山ら）が退陣、家老真田志摩とその一派（家老鎌原伊野右エ門、長谷川深美ら）が政權を握った。そして、旧弊「御一洗」と称して、旧政策を改め、緊縮政策を断行、恩田頼母派を圧した。特に翌五年、幸貫の致仕（五月）、死去（六月）、孫幸教（十八歳）の第九代藩主就任を機として、真田派の勢力は募り、専權・私權を振うにいたったので、藩主幸教の威令は殆んど行なわれない状態であった。後掲の目付一場茂左エ門の「口上覚」は、當時の藩の政情を端的に示している。したがって、これに対する恩田派の反対機運は激化しつつあった。

藩の政情、かくのごとき時、嘉永六年、異国船来航一件——佐久間修理一件が勃発したのである。この事件の経緯は、後掲史料に詳しいので荒筋だけを述べると、六月三日米艦来航を機に、象山は江戸家老望月主水と謀り対策を進めた。まず浦賀へ視察に赴き、六日帰府して江戸藩邸の防備を固めるとともに、藩地へ急使をたてて軍兵の出府を命じ、九日軍議役に任ぜられ、藩主に説いて幕府へ内願書（藩主名）を差出し、品川御殿山の警備を分担しようとした（老中阿部正弘に面会、防備の内諾を得る）。これを知った国元では、出兵の準備を整え、十五日出發したが途中で出兵中止令をうけた（米艦十二日退去のため）。しかし、この出兵、御殿山警備の措置を修理の奸謀とする見地などから反対の立場をとった真田派の家老鎌原伊野右エ門、郡奉行長谷川深美（昭道）らは、十八日急ぎよ出府し、藩主に謁し、江戸家老望月を動かして、老中阿部正弘から内願書を取下げるとともに、象山を罷免（軍議役、海防臨時出役）、

江戸での砲術指南を禁止し（六月二十四日）、在所松代へ移居すべしとの命令（七月五日）を出した。象山は、これは君側の奸の仕業となし、この命をきかず、藩主へ意見の上申をしようとして屢々御目通の願書を出したが、遂に鎌原ら反対派のために妨害されて実現をみるにいたらなかった。この間の事情が後掲史料で問題にされている。右のような緊迫した情勢下で、幕府側から象山の才を惜しむ動きがあり、阿部老中や川路聖謨らが藩主幸教に説いたので、象山の江戸居住が許されるにいたった。しかし、象山らは真田派の強引なやり方に穏やかならざるものがあつた。

かくして、一旦おさまった政争も、その後もくすぶり続けたが、偶々このころから「仮養子一件」なる風説が拡まり、真田派は苦境に立つにいたった。この風説は、首席家老真田志摩（桜山）が自分の子を藩主幸教の仮養子とし、松代藩十萬石の領地を横領しようとする隠謀あり、との風説である。藩主幸教は年少で嗣子がなかったので、万一死去の場合は幕法にふれて、真田家の断絶を来すので、これを慮って仮養子を設定しようとしたという。この風説は藩主の耳にも達し、一藩をあげて非難の声があつた。恩田派はこれを好機と反撃に転じ、遂に九月二十四日深夜、佐久間象山は目付一場茂左エ門を同道、八丁堀御殿の松平越中守（桑名侯、幸貫の兄）に面談、「口上覚」（差出者名、一場）を呈上して藩の政情を訴へ、周旋の勞を依頼するにいたった。他方、真田派の策謀もあり、政争は深刻化したのが、結局、家老小山田沓岐らが調停役となり、同年十月八日家老真田志摩は免職、ついで鎌原伊野右エ門、長谷川深美ら真田派の面々も免職となり、代つて恩田頼母が執政として返り咲き、山寺常山は郡奉行兼御側役頭取、佐久間象山は軍議役兼督学となり、恩田派の天下となった。後掲史料でも明らかのようにこれら両派における主謀の中心人物は、真田派は長谷川深美（家老鎌原伊野右エ門協力）、恩田派は佐久間象山である。

その後、両勢力は何回も交互に政權を交代して幕末にいたるが、そして、この間、象山は例の吉田松陰密航事件に連坐して、在所松代に蟄居九年間に及ぶため、表面的には彼の活躍はみられないが、蟄居解除の文久二年からは再び



公武合体論的立場で京洛に活躍するようになる。翌元治元年六月には松代藩兵の近江大津警備・天皇彦根移遷策などをめぐって、反対派の鎌原・長谷川らの猛反対をうけ象山の計画は挫折した。かくして、この七月象山は京都で刺客に殺害されるのであるが、これらについてはここではふれない。

以上は嘉永六年佐久間修理一件及び仮養子一件のあらましである。これに照応した目付調書類のうちから、重要なものを選出して史料紹介をすることにする。これら調書類は嘉永六年十月付のものが多く、右の両事件の調査を大規模に実施した結果とみられ、仲介役の家老小山田竜岐が中心になり、目付、特に江戸目付を介して調査したものともみられよう。掲出史料名を列挙すると次のとおりである。

#### I 「別紙書類一印より十四印迄之手順取調書取」(嘉永六年十月)

これは佐久間修理(象山)に対する目付の調書である。二部分より成っているが、調書の前半は象山が米艦渡来一件について、詳細な陳述をしたものである。文中に一印より十四印まで記入されているが、これは別の調書「書類十五通」所収の各史料に照合するものであるが、小稿では紙幅の都合で割愛した。(上述の藩主幸教の幕府への内願書、御殿山警備もこの中に所収されている)。調書の後半は、今回の米艦来航一件の元兇を長谷川深美とし、これを痛評したものである。両人間の対立の激しさを示すものといえよう。

#### II 「御尋ニ付申上」

これは「佐久間修理御目通願書」に関する江戸目付馬場弥三郎の調書である。米艦来航一件の時、象山が藩主に御目通を願ったのに、鎌原、長谷川ら反対派の妨害で御目通が叶わなかった経緯に関するものである。嘉永六年六月九日より同七月五日までの修理・目付間の往復書状、上申書などが所収されている。

#### III 「御答案 望月主水」(嘉永六年十月十日)

#### IV 「御答書鎌原伊野右衛門」(同年十月)

右二史料は、江戸家老望月主水と国家老鎌原伊野右衛門が、小山田沓岐家老(カ)へ差出した答弁書である。仮養子一件当時、象山が松平越中守(八丁堀様)へ申入れた「口上覚」(史料V参照)に関する答弁書である。鎌原の「御答書」は望月の「御答案」の各箇条に对照させて書いたと述べている。江戸家老望月は米艦来航一件の初期段階では象山に加担していたが、鎌原らの急出府以来、鎌原側に傾いた。国家老鎌原は首席家老(無役席)真田志摩の下にあり、長谷川深美と提携して、真田派の中心人物となった。しかし、同派の主謀は長谷川であり、恩田派の主謀佐久間象山と張合った。志摩、伊野右エ門、深美らは、ともに象山を嫌悪していたという。史料のなかでもそれがうかがえよう。その象山評は興味深い。結局、この答弁書では、望月、鎌原ともに自分の非を認めている。

#### V 「口上覚」(嘉永六年九月二十四日)

仮養子一件なども起り藩の政情が悪化した時、佐久間象山が江戸目付一場茂左エ門を同道して、八丁堀御殿へ松平越中守(桑名侯、幸貫の兄)を深夜訪れ、訴えた口上書である。当時の藩の政情が活写されている点が注目されよう。名義は目付一場となっている。この「口上覚」願立が問題となり、上掲Ⅲ、Ⅳの史料のごとく小山田家老(カ)による望月、鎌原両家老からの事情聴取となったのである。次掲Ⅵの史料のごとく目付からも同様の聴取が行なわれている。

#### Ⅵ 「佐久間修理願立一条御尋ニ付申上」(嘉永六年十月二十三日)

上述、Ⅴの史料のところで述べたように「口上覚」に関する目付の上申書で、家老小山田沓岐へ差出したものである。

## Ⅶ 「御内密御尋ニ付申上」(嘉永六年十月十六日)

目付役齋藤友衛が、佐久間修理願書一件などについて内密に尋ねられた際の上申書である。小山田家老宛に差出されたものとみられる。

## Ⅷ 「長谷川深美等御咎之筋之儀御尋ニ付申上」(嘉永六年十一月)

表題にあるごとく目付が江戸において家老小山田老岐へ差出したものである。佐久間修理一件・仮養子一件などについて黒幕的存在とみられた長谷川深美の咎が明らかにだったので、その処罰についての意見を家老小山田が目付に命じて提出させたのである。長谷川本人に対する処罰文案及び本人忤の家督相続文案などもみえる。なお、この仮養子一件については「忠孝之大義ニ拘り候事」と漠然とした表現をとっているにすぎないが(タブーのせい)、安政五年の目付の「評議」書、文久元年「五家御咎書附」などに「仮養子一件」の文字がみえる。後にまで尾をひいているようである。(主席家老真田志摩は既に十月八日付免職)。

〔注〕上掲諸史料の解説は、紙幅の関係で、その内容分析にまで論及できないので、簡略にした。

## 別紙書類一印より十四印迄之手順取調書取

佐久間修理

拙者当夏異船渡来之御、軍議役被御付一時御兵備之事御任セの様相成候発端を申候へハ、六月四日曉、或人より昨三日昼後亜米利加船四艘来着、浦賀湊大騒動の趣志らせ候ニ付、直様新橋御屋敷へ罷出、望月主水へ其段報聞仕、さて申候ハ昨年より専ら風聞も有之通、此度渡来候上ハ容易の事ニあるましく、いつれにも其形勢を探索候方可然、幸ニ某外御用も有之候へハ罷向ひ致見聞、其動靜報聞候様可仕と申候所、至極可然とて足輕兩人差添候即時出立、其夜中浦賀迄罷越し六日昼頃迄ニ同所之事情大略聞緒、其故一番ニ認め此度の義ハ実ニ容易あらざる事と被有候間、御人数調等も手落無之様致し度と申義も書添一人の足輕ニ持セ主水方迄申送り、其昼後俄ニ蒸氣船観音崎を乗透り内海に向ひ入込候とて、浦賀内騒動候ニ付、一般にても内海へ乗入ってハ御府内も喧騒ケ敷可有御座、御屋敷ニ於てもいか計りかと氣遣候ニ付、即刻浦賀引払ひ途中も殊の外急ぎ候て、其夜御屋敷まで罷帰り今も異船一艘内海に乗入候所、諸方御固御人数手近を束ね居候次第、委細ニ申述へ此様子にてハ追々尚猖獗のふるまへニ可及、右ニ就き候てハ海防臨時出役之御手配簡要之義と申立候所、尤ニ候とて主水より夫々諸向へ申渡し、拙者へハ諸向へ立入心付候義ハ何によらず存念申候様申候ニ付、先大砲御備向詮儀致し見候所、不調ひ勝の事故、塾生蟻川賢之助御在所表より砲術并に西洋学修業の爲に出居候者（注↓次行へ続く）

大砲御用掛被仰付候様申立、是迄少時砲術心掛居候子弟をば尽く引出し昼夜骨折らせ候所、七日八日兩日ニして少しく得条理候ニ付、九日早晨主水方江罷越し、さて申候ハ外寇之義ニ付てハ感応院様御終身御苦勞被遊、此表にて大砲数挺御製作有之、御在所表より御取寄セニ相成候も御座候ハ、畢竟する所公辺御警衛之御為と被奉有候、斯く容易ならざる御時節と相成諸家様ニも追々御固御人数被差出候様被蒙仰候趣ニ候へハ御黙しニ為在候ても御屋敷

に数挺之大砲御用意御座候義もおはやけニ聞えたる事ニ候へハ、明日ニモ御固場被蒙仰候はんも難計、又左なくとも異船内海に乗り入自然乱妨に及候ひ候節ハ、火急に御防被蒙仰候ハ必然之義と奉存候、然る所大砲を用ひ候ニハ地勢を詳ニし其勝地ニ拠り候事兵法の至要ニて候処、火急の際ニ当り候てハ公辺御指図其地勢之利害深く御思慮を為運候に及ハざる義も可有御座、自然御不幸ニして大砲用ひ難き場所へ御人数被差出候様被蒙仰候節ハ、感応院様折角と御終身御苦勞被遊御製造に相成候御重器ありてなきか如くニて有御座、其時地の利害をも弁へす強て惡地に大砲を引出し誤て敵に其砲を奪われ一発ニても其筒を以て本邦の人を打れ候等の義御座候て唯一時利を失ひ候のミならず、天下後世御家の御恥辱無此上義と奉有候、依て大砲を用ひ候ニハ先づ地の利を捉ふニしくハ無御座候、某かねて料見仕候ニ市中を焼払ひ其形勢ニ従ひ備を設け候ハ、御府内もよき場所幾ヶ所も可有之候へとも、左なく候てハ御府内ニ於テハ大砲ハ難用、仍て已む事を得ず御府内ニ最近く候て大砲を用ひ得へき場所を捉候ニハ御殿山の北辺可然と被存候、異船万一御膝元まで乗入候節ハ、先づ其所衝に当り候へとも勝地ニ候故、防戦の便り宣しく此節此場所御取定め御固め被蒙仰度と御内願候由候様仕度、左様御座候節ハ第一公義へ被為対夷賊衝突も仕候はん場所御受持の次第ニて、御忠節たるへく感応院様へ被為対、御誠忠の思召を被為継候御趣意ニて御孝道ニ可有御座、又御家中の面々とても家国天下の為に其身を殉し候ハ勿論の事ニ候へども、無謀ニして空しく其肝腦を地に塗り候はんハ傷ましき義に候所、某申立候通ニ候へハ同じ砲を放ち候にも敵砲を避けなから放ち候手續有之、又事誼次方殿様御出馬御座候而も右場所にて候へハ、洋名ボムフレイと申敵のボムベンを防ぎ候小屋を建て、其内へ入れ奉り候ニ便よく時に取り名の為め実のため内外上下良金の策、此外ニ有御座ましくと申候所、主水ニも至極と相納れ候ニ付、しからは某を御内使者として阿部様牧野様御両家へ可被遣、尤も御留守居同道ニて表向の御口上ハ御留守居申述緊要の御口上ハ某引受け申述候はんと申候所、いつれも然事とて伺済之上御内使者被仰付候、其節の御口上案一印之通

(老中阿部正弘・牧野忠雅)

(津田越)

(内願書)

ニ御座候、此時軍議役の名目御仮し被下、其後真ニ被仰付候、楮既ニ斯く御固場御内願御座候ニ就てハ御在所表海防臨時出役御用意の御人数被差出候様申之、其段被仰出、主水より然与以飛脚申遣候所、御屋敷ハ丸の内ニ候へは辺御警衛向も嚴重なるへく、又万一公方様御本丸御籠城など申事ニ候ハ、御奥ニハ御本丸へ御入ニ可成候、左候へハ御人数差出し候ニ及ハス等の歯牙に掛らざる議を以て致評決御人数一切不差出、言語道断不埒の義ニ付、其内鎌原伊野右エ門・長谷川深美出府之沙汰にて之故、其兩人出府候ハ、一座評議も可有之、其節忠孝之大義を以て御人数出無之不筋を正し從來御在所ニ於て右等之心得違無之候様致し候ハんと存し居候所、十八日夜伊野右エ門・深美着府にて其後一度之評議ニも及はず、拙者存念尋ね候事も無之、廿四日二印之通被仰付候、廿六日主水より三村晴山を以て暫之内往来を断ち度よしを申、其事ニ付晴山迄内書を以申遣し候趣ニ就き、其内書一覽致し度段申候所、内々ニても見セ具様候など申頼有之候間見セ難しとて見セ不申、且言語のはし／＼不密の廉共有之(注↓次行へ続く)

拙者、主水・伊野右エ門・深美等の非を責て申候義御座候所、晴山申候ニ其作之義を申し彼等が爲に暴ニ綱乗ものへ入れ御在所江送られ候ハ、いかになと申事候ひき(注↓次行へ続く)

伊野右エ門・深美か奸計ニ出候ニ無相違と存し候ニ付、計策を設けて其内書を奪ひ候所、果して三印の通ニ有之、拙者海防の掛り御免の義も主水か絶交致し度と申出候も主水か義を知らず喪ふ事を思ひ候故の義ニ候へとも、其起る処ハ深美か奸計にて、君庁を惑亂し御書下け御趣意など申事を作り出し候ニ淵源し候事明白に相分り候、其内書を奪ひ候ハ廿七日之事にて候所、廿八日昼後主水義拙者宅へ相尋ね面会致度よし申入候ニ付、拙者存し候ハ竊初共ニ事を謀り忠孝之大義ニ叶ひ候を、中途ニして忽ち不忠不義の奸党に与し、初め共に謀り候者を退け、剩へ年久しく交り候友誼をも蔑如し非義を以て絶交致し度など申出て、その奸謀の来由をしるしたる内書を奪はれ候へハ、又おめ／＼と顔色をさらし某方へ参り候ハ、定て数々之言訳ニても致し、右内書を取戻し度等の志ニも候敷、又夫も深美か計らひにて左様之とも致し内書を取戻し候様ニと被勸参り候義か、いつれに致し候ても礼儀廉恥を失ひ候限

りと存し、其節在宿ハ致し居候得共存する子細有之面会致し兼候段相断り返し候事ニ御座候、  
ニ、異船渡来以後容易ならざる世の形勢に相成候所ニ、御家の御家老共形の立候義理を弁へざる者共ニ有之、其下  
ニ立ち事を用ひ候者ハ深美の如き奸邪の小人ニて、君側ニ盤据し不善を働き候事国家之大害と存し、且拙者義元來  
不徳不才ニハ候へとも、聊か忠季の大義を弁へ居り、今度軍議に付致建白取計ひ候義ニ於てハ、外公儀への御忠節  
に相当り、内御祖先への御孝道ニ相叶ひ、独り今人に愧ざるのミハ無御座、古人ニも愧申ましく存し候義ニ御座候  
を、故なくして軍議役并海防臨時出役御免被仰付候ハ、全くかれ等の計らひニ出候義と被存候、拙者一人の身の上  
ニ屈徳を受け候ハ意ニ決ミ候ニ足らざる義ニ御座候共、忠孝の大義ニ叶ひ候義を御座候御座候ハ則忠孝の大義ニ御  
戻り被成候義、忠孝之大義に御戻り被成候てハ、信之様御以來忠孝之御名家難相立、第一公義へ御対し被為濟不被  
成御筋合ニて、無此上御国家之御大事ニ奉存、此大義を具に信濃守様御目通ニ於て申上度、廿九日四印手控の次第  
を以て御目通相願ひ候処、五印の始末ニ有之、無余議御目付へ御取次を頼ミ候処、伊野右エ門ハ其路を塞ぎ六印の  
次第ニ就き、是ニてハ言路の壅蔽と申ものニて乱国の風ニ有之候、某御目通願ひ候も御人私に願ひ度と申候ハ、  
何かの疑念も可有之候へとも、御用席列座御側役御目付等内外御役人其御席ニ被差置、其上ニて被召出申上候条ニ  
御聴被成下候様奉願候を、何故ニ如此恐れられ候事や、某事ハ狐ニも狸ニも無之候間、人の多き所更に怖れ不申、  
何も国家の御為ニ候へハ、猶勘弁候様申遣し候所、七印之通返書有之候、御家老共ハ主として言路を塞ぎ候者の義  
ニ付、かねてハ其所へ申候事無益の義と存し申出も致さず候所、御側向御目付とも其筋皆塞り候上ハ真月院様へ内  
密申上、何とか御宿も蒙り度御守役のものへ申候ても、是も御表ニて左様ニ候てハ難申上と申ニ付、外ニ更に手段  
無之、因て改て八印より十三印迄主水と及往復候、十二印の如く理を尽し申候ても形の如く非を遂げ候上ハ、則に  
致し方無之、其節既に御親類様の御内へ極密右壅蔽の次第を申立、此弊を御除き被成下候様奉願度とハ奉存候へと

(幸教)

も、信濃守様御弱年とハ申なから如此奸人党を結び非義を働き候事、遂ニ信濃守様御不明に歸し可申、其義を外様へ相発し候義甚恐入候次第と存し差控へ居り、御うち／＼にて何とか仕方も可有御座かと思考罷在候様処、八月五日十四印の通被仰付候、其以来塾生蟻川賢之助新橋御屋敷罷越し門人磯田小藤太<sup>御側御納戸相勤め</sup>大砲掛<sup>御座候者</sup>方にて其後の海防之評議を承候ニ、十万石位の御身上ニては海防御手充も御行届き難被成、仮令御行届被成候而も外様御行届も不被成候、此方様はかり御張込被成候ても異変の節御一手ニて御功名も相立ち申ましく、左候へハ公辺向唯名目計リニ御人数を被差出、事ニ臨ミ候てハ巧に逃げ候様致し候か、長策ニ可有之、玉目大なる大砲ニてハ費も多く掛り、且其引上候方不便ニ付名目計ニ輕便なるを用ひ候方可然と申評議にて、是迄の調への内々メ目玉毫挺其儘差置り其余ハ残らず三百目五百目ニ引替、御人数書、行列帳をも改め候趣ニ相聞之候、拙者承之齒を切て申候ハ、いかに奸臣事を用ひ候へハとて、忠孝の御名家殊に遂翁様御修身一途の由誠忠ニて公辺之義を格別御大切に被思召候を、いかなれば御卒去後纔々一年ニして右様不忠不義の議論行ハれ候や、斯ても一人正論讜議の士無之、大小御役人其下風に從ひ、唯々諸々候事、澆季の世の常態とハ申なから言甲斐なき次第ニと其儘ニ流れ行き候てハ忠孝の道地に墜ち國家の大本難相立候ニ付、何とか致し邪説を闢き奸人を退り、國是の正道ニ歸し候様仕度、日夜憂勞罷在候、然る所此度はからず俄に右書類共太守様御覽に入候運ひニ相成候ハ、是又偏に遂翁様在天之御霊の被為導候御事にも候歟と被奉存候間、何分も太守様御賢慮を以て是迄壅蔽ニ相成居候義とも悉く信濃守様之御耳ニ入り御供ニ御相談ニて公儀へ御不忠節に相当り御先代への御孝道ニ不叶義ハ残らず御改ニ相成り、永く信濃守様御家の御瑕瑾ニ相成候様の事、不差起候様此度御一洗被成下候様奉願候、外他事無御座奉存候、以上

(嘉永六年)  
十月

真田信濃守様御家来

佐久間修理



右申上候忠孝の大義ニ戻り公儀を憚らざる企仕候奸邪の魁ハ長谷川深美ニ有之候、此者義ハ元來親に不孝ニて妻を娶候以後、別して宣しからぬ事共有之と相見え其父ニて候もの一夜深美夫婦を殺し候ハんとて寢所へ切込候所、夫婦とも痛手を負ひ候へとも、命ハ助かり候、其父ハ其場ニて致自殺候所、親類共打寄見候所、其致自殺候刀ハ深美夫婦を切付候刀ニ無之、深美カ差料の刀腹ニ立ち居候と申事ニて候ひき、其形跡異状の上より案をつけ候へハ曖昧の際いかなる事実ニて候ひしや難計考候へハ、老候程身の毛もよたち候義ニ御座候、其節ハ其支配頭ニ姑息のもの有之何様か回護致し其父乱心と申候ニて自殺ニ刀の違ひ候なとも吟味無之、一通の自殺として事を仕まひ勤めをも引かせ候いて済せ候所、其姑息の恩を受け候ものの落度を拾ひあけ其義を以て志摩・伊野右衛門江取入拔擢を得事を用ひ候様相成候へハ、不忠不孝を以て其君に勧め奉り、讒を繼し言路を塞ぎ殆々国政を乱すに至り候事、大惡無道と可申候、此の如き者嚴敷御究明之上、明カニ御曲刑を正されすハ国家之上無窮ニ害可有御座奉存候、以上

## II

御尋ニ付申上

(江戸目付)  
馬場弥三郎

## 卷

佐久間修理御目通願書取写

御目通奉願候口上手控

御国家之御一大事与奉存候義御座候ニ付、御目通を以奉申上度奉存候、但し私義ハ多く人に悦ハれざる者ニ付、御  
私ニ而御逢等被仰付候而者その忌義の際より或ハ御君徳の御煩与相成候様之義出来候ハンも難斗、且ハ御国家之御  
大事与奉存候義ニ付、御用席列座御側役御目付等内外御役人迄も其御席ニ被差置、其上ニ而被召出申上候条々御聴  
被成下候様奉願候、斯く奉願候義より仰山なる義与思召も可有御座候得共、忌疑生暗鬼などの謔も御座候得者、何

れも光明正大之思召を以左様被成下候様奉願上候

二

佐久間修理様

(江戸目付)  
馬場弥三郎  
一場茂右エ門

御目通御願之義ニ付、別紙御預り申候処伊野右エ門殿々右者差戻候様御差図ニ付、御取次致し兼候間、別紙御返却致し候、右様御承知可被下候、此段得御意候、以上

(嘉永六年)

六月廿九日

三

馬場弥三郎様  
一場茂右エ門様

佐久間修理

御手紙致拝見候、御国家第一大事の義ニ付、御目通を以て奉申上度、但し私事ハ人に悦ハれざる者の義ニ付御払ニて御逢被成下候而ハ、或ハその忌疑の際より御君徳の御煩と相成候様之義出来候ハンも難計、且御国家の御大事と奉存候義ニ付き、御用席列座御側役御目付等内外御役人迄も其席ニ被差置、其上ニて被召出申上候条々御聴被成下置候様奉願度と申義、御側御納戸を以て願ひ候心得ニて、当番之御納戸呼出し右御上手控差出候所、此義ハ当月廿三日修理罷出御目通願候而も不被遊御逢候間、其段相断候様上書等致し候ても猥ニ御取次不致候様、望月主水殿被仰渡候者、長谷川深美達し有之候ニ付、御取次出来兼候趣申聞候付、無余儀御役方へ差出し候義ニ御座候、然ル所、伊野右エ門殿云々之次第ニ付御取次御出来兼被成候趣、右御重役へ差出し候て宜しき御筋と候へハ私共よりハ因より御役方の手を経ずして御重役衆へ差出し宜敷義ニ御座候処、段々御内話をも申候通の次第ニて御重役へ差出

しかね候ニ付、畢竟御役方へ差出し御取次奉願候義ニ御座候、右を只今の御重役等へ差出候ハ御手違の次第と奉存候間、其御手違の所御組戻し被成、右別紙御取次被下可然道理と奉存候、不容易御大事を申上候ハンと申候に御側向之方も壅蔽有之御役方ニても其通りニ候てハ御国家ハ暗黒世男と成り可申、嘆ハしき事ニ奉存候、能々御勘弁此所ハ御役方御真面目の御所置ニ被成下候様奉仰候、御国家の御一大事と申候を壅蔽候様ニと其党の重役衆被申候へハとて、其通りニ被成候てハ御忠義の御筋合とは不奉存候、何分も御国家之御為厚く御勘弁被下度奉存候、依て別紙尚又御手へ差上申候、別して可然奉願候、以上

六月廿九日

四

佐久間修理様

馬場弥三郎  
一場茂右エ門

御目通御願之義ニ付、御別紙御預り置申候処、伊野右エ門殿右者差戻候様御差図ニ付御別紙返却致候処、猶又被差越云々ニ付、御国家之為厚く御勘弁候様委細被仰下致承知候、然ル処、前文之次第故差図ニ戻り取扱も出来兼候間、再及返脚候、右様御承知御別紙落手可被下候、以上

六月廿九日

五

馬場弥三郎様  
一場茂右エ門様

佐久間修理

御目通奉願候義ニ付、手控別紙差出し置候所、伊野右エ門殿右者差戻候様御差図ニ付、御返却と申事故、過刻尚又

差出し御國家の御爲厚く御勘弁候様得責意候所、兎ニ角御差図ニ御戻御取扱も御出来兼候条被仰下、別紙猶又御返却不及是非次第ニ存候、別紙慥ニ致落手候、以上

六月廿九日

## 六 佐久間修理御目通願候義ニ付申上

### 御目付

此程佐久間修理御目通奉願、御家之御大事申上仕度、御側御納戸御側役等江御取次之義相頼候處、右者六月廿三日御用番々御達有之候ニ付、御取次致兼似趣相断候ニ付、当御役方ニ而申上呉候様相願手控差出し候ニ付、預り置其段御用番江申立候處、右書面者御手前様々差戻候様御差図被成下候義ニ付、当人江相戻し候義ニ御座候處、右書面御下ケ相成候己前御小座敷江御引廻しニ而御役方江御密談御座候節、修理義礼義も不升、禽獸ニ等者と申趣被仰候處之処、修理義右者右之廉洩れ聞仕、聞咎候哉、御役方其座相下り修理江申含仕候半与御内使者受之間被罷越候處、修理申聞候者只今伊野右エ門殿修理義を禽獸与被申候儀、士之扱も不被得、以之外之義、竊一応承り糺呉候様度々申聞候得共、右者如何可有之哉、御役方逆も心を痛メ承り候義者無御座候、駢与左様被申候与申覚も無之、依而今更承り糺杯与申義者致兼候旨相断候處、執政之鎌原氏士之事を被申方も不被知義、其分ニ者致兼候趣、嚴々ニ申候得共、素々相頼候肝要候、御目通願相叶ひ候与不相叶与之義ニ無之、枝葉之事殊ニ如形之修理且公辺等之義すら影言ニ者彼是与惡様ニも申候も可有之哉、際限も無義旁取留不承、扱又御引廻し御密談之義猶更譬ひ洩れ聞等仕候者有之候とも、支品にも寄り可申、右様之義前後不済明細認弁し候様可被一々覚不申、乍去大凡之廉合者右様之義与奉

存候、修理御目通奉願候前後手續等ハ同人三印手紙ニ而委細相弁候様奉存候、依而往復五通相添御尋付、此段申上候、宜御勘弁可被成下候、以上

(嘉永六年)

七月

御目付

七 当夏中異船渡来之義、三ヶ条御尋ニ付申上

(江戸目付)  
馬場弥三郎

当夏異国船渡来之節、自然御人数出之調佐久間修理軍議役被仰付、取斗ひ之次第御尋御座候

右者当六月三日、浦賀表江異船渡来候間、修理義何方ノ駄駝与承り候由ニ而、彼之表江物見ニ罷越、彼表ノ其次第

御用番江書を以申中上候右書面者昨日御内々御下ケにて拝見仕置候蔵ニ御座候其内七日頃ニも御座候得し哉、同人罷歸委細之次第申立仕候様子

ニ御座候得とも、右者私儀駝与相心得不申候得共、夫々同人軍議役被仰付、御人数揃ひ万端セ話仕候處、一体是迄

御備向之義ハ野戰専ら之手心之調ニも有之候處、此度修理見込ニ者台場戰之様子改、手心も相違仕候廉も有之候得

とも、何を申上候も火急之場ニ相臨ミ居候義、切段々御出来居候西洋大銃組合せ五挺可被考出与御試ニ相成候處、

右大銃打手人も了也、名前守り者有之候共、実事ニ打放出来候者ハ中俣一平等漸三四人も可有之其他者いつれも不

案内之者共斗ニ付、何ら御用立之義ニ者不参義与推察仕候、依而修理義間ニ髪を容さる場ながら右術業戰士并御近

習役等江仕入込、急時之御用相立候様ニ与精々教諭仕候様子ニ見受申候、扱又是迄御備向之不整与申も寢早私共初

メ出役被仰付候ハ四五ヶ年ニも及ひ候得ニも、いまた駝与御整ニも不相成罷在候ハ急而懸リ被仰付候ながら、何共

奉恐入候、且不安心至極之義ニ者御座候得とも、第一御在所表之御軍法さい御不極リ之處故、此表之義者猶更差支

筋も数々有之、御法令御極与申ニ者至らず御不整罷在候内、異船渡来之事ニ候得者、申者如何ニ候得とも只々烏合

之兵与申察ニ而何を以進退懸引出来候事哉、何分不安心痛心之限リ与奉存候、然ル處当時高名公辺御始メ諸家ニ而

も御用有之候修理事軍議役被仰付候共、時ニ取而者御權道左のミ御趣意違ひ共不奉存、随分御尤候御儀哉其相心得、先ツ彼是与及ふ丈御役丈之申談心配セ話仕候心得ニ御座候、依而何歟不及事なから其節者修理義を一力与存召在候

一右退帆後、長谷川深美儀出府仕、以之外之取計与及対談次第、右者深美義着府仕候後二日程茂相立、私御長屋江見舞呉候節申聞候趣意ハ、此度如何之訳ニ而修理御取用ひニ相成候哉、渠事は中々平常非常共ニ御用ニ者不相立仁物、実ニ跡々之始末御用番ニ者如何被成候思召哉、誠ニ相濟まぬ事、一体公辺ニ而異船舶備向杯者本ソ氣ニ成御手配有之候得者、素々浦賀を越、此辺迄乗込候義杯者決而無之事、左も無之ニ御屋敷杯ニ而其様ニ本ソ氣ニ成防禦筋被遊候ニ者不及、万々一大銃杯被打懸候共、右火力の程合も有之事候間、玉の參らぬ辺江逃て居候得者宜敷、然ルを御殿山御持場御内望御座候杯与申ハ以之外之御心得違ひ、右ニ而者何分其場一虎口御持堅メ一足も御引有之候而者不相濟御筋合、右ニ者御備向別事御整之上ならでハ難申義、殊ニ御人数御引廻し之事ハ御用番御職分ニ有之、然ルを懸り御訴訟杯与者以之外之義、彼是當時御用番ニも不被御目覚ニ而者不相濟吏之よし申聞候処、右者竊早諺ニ申跡の祭り、私之彼是与諸向論談仕候義ニも有御座間敷吏ニ、何吏も第一の異船舶帆後人氣も平穩之場ニ而者左様是非善惡之差別宜敷分別も出来可仕事、乍去異船渡来斯迄内海江乗入儀有様、早半鐘さへ打候ハ、速ニ御出勢与申場ニ而者薄紙一枚のあわひ中々御府内一流之人氣も違ひ、既ニ未年の御在所地震之節同様、世界相違仕、平穩之節考候様之物ニ者無之与申居候義ニ御座候、右言語中々此表之取計ひ向、都而惡敷与申様之意味相籠居候得とも、随分右ハ唯々此表不行届の義も可有之候得共、其節江府詰合御役人之不器量無余岐事ニ御座候、乍去兼而石見殿御懸り申御打合も右之、御役方杯者名前迄差出置候御在所御役人、右様之節社御用番被仰越候ハ、何ハ共あれ急出府御座候而社可然、乍恐第一御上御始メ都而上々様方此表ニ被為在候義、殊ニ年来御人減しニも相成居、万事御不都

合之處、人情ニおいて少數御察も御座候半敷、彼是与行間違ひ相成候事ニ可有之候得共、御在所々出府延引罷成候者当表ニおいてハ一統氣向相損し大力落しニ相成候間、氣も折ケ候事与推察候、僥倖其内異船退帆仕、一統穩ニ相成候上者、都而御在所出府無之方、其図ニ當リ候事与感心仕候得共、何分其場ニ臨ミ候而者前知不仕、愧恥仕候義ニ御座候

一其後修理、為御国家御一大事申上度候間、御用席始御列座之所ニ而御目通申上度旨申出候節、御用番并伊野右エ門殿江伺候節、御銘々御差図振ニ候次第、右者修理義當六月廿九日私義當番ニ御座候處、別紙弔印之趣を以、御目通願呉候様申聞候付、其段御用番江相伺候處、於御小座敷御用番并伊野右エ門殿・玄蕃殿御一同御評議ニ而御用番思召ニ者、御目通苦ケル間敷旨御申談御座候處、伊野右エ門殿ニ者差留之方可然思召候御様子、玄蕃殿ニハ可否如何ともはきと御申不被成候處、伊野右エ門殿いづれニも御勘弁可有之与申義、左も候ハ、御同人江相同取斗い候様、尤於御用番者御目通不苦与思召候間、弥御差留之方ニ候ハ、御同意ニハ無之旨修理江訳而斷置候様被仰渡候、其後修理書取御取用相成兼候ニ付、当人江差戻候様伊野右エ門殿御差図御座候、就而者前文御用番与御趣意違ひ居ハ折合兼候共書面差戻候様伊野右エ門殿御差図之旨、則当人江口上を以由斷差戻、其段御用番江も御聞置申上候、然ル処右一条修理義彼是承伏仕兼候次第も御座候得共、兎ニ角伊野右エ門殿御差図之次第如何共致方無之ニ付、書面強而差戻候趣、別紙仰付六通ニ而御承知被成下度奉存候、其節之一件始末認取差出候様伊野右エ門殿江御渡候ニ付、六印之趣認取差上候處、右ニ而ハ荒々敷弁兼候間、巨細ニ認取差出候様被仰渡御下ケ御座候處、何分巨細与申程ニハ前後駢与御覺も届兼認取出来兼猶予仕居候内、御帰国与罷成、先ツ右者左のミ差急ぎ不差出候共宜敷旨、御内々御沙汰も御座候ニ付、其後延引仕居申立不仕罷在候得共、大凡者右六通之趣ニ御座候

一右三ヶ御書取、親類窪田慎六を以御尋御座候、過去之事ニ而失念仕候義も御座候得共、是迄之手統荒々差居候

趣、乍廉漏認取申上候、尤前後仕候義并御不審之廉等も御座候ハ、猶御尋も被成下度奉存候、宜御勘弁可被成下候、此段申上候、以上

(嘉永六年)  
十月二日

馬場弥三郎

### 御答案

(江戸家老)  
望月主水

佐久間修理八丁堀様江書類を以願立候付、御下問被下候次第、左ニ及御答候

当夏異国船渡来之砌、(松平越中守) 当人周旋并私取扱之次第手順、書面之通相違無御座候、但第七十五六行御在所江早速御人数

出有之様御用番舍人殿江掛合申遣候ハ、右御殿山御願立ニ不拘、其以前六月七日暮時出兩人飛御刻付同様差立申候

様申付遣候、其後御願立之節ハ再び申遣候義ニ御座候、(河原) 右両度之往復ハ十八印迄一緒相添候、然ル所修理相認候通之次第ニ而、御人数

早速不差出、此表ハ掛合方何ニ而も粗惑之筋無之と相心得申達候処、決し兼候の或ハ再度之節ハ伊野右エ門殿出府

面語可有之など申来候義如何も不審至極不得其意候ニ付、追而篇与懸合候義も可有之旨、先返報差出承知之旨申来

候ハ、右書類中ニ有之通りニ御座候、然ル所令般志摩殿罪条ニ右御人数出無之義も相籠り居候御様子之所、内証事

実ハ兎も角も、表向往復者舍人殿ニ御座候、然ルを其罪志摩殿一人ニ歸し候而ハ公平之筋与不被存候、斯申旨候而

ハ自己之事如何ニ候得共、修理願立一条も伊野右エ門殿主宰深美謀事之由ニ候へ共、結極同道之取斗ニ陥り候私之

罪事柄者迷ひ候得共即舍人殿与匹敵候事と存候御勘猶可被下候

一第一右之次第ニ而指揮も其図を失ひ候義ニ付伊野右エ門着府之当日、別紙別帳乾坤ヲ御海防御人数取扱御訴訟之義



勘弁申出候義ニ御座候、尤私心組ハ素々法乱一致之義ニ付、海防取扱出来兼御役ハ相勤居候与之心得ニ者勿論無届候得共、眼前此表ニ而取扱候松衆儀を以御決心及掛合候御人数出を再度迄申紛し差出しも無之、御上ニ者御在所ニ不拘出来候事之様ニ種々差急ニ被仰出、其上前文御人数出遲滞ニ及び候も全く修理ヲ用ひ候故之義ニ有之杯申義を承込候様子柄ニ而ハ、斯御訴訟相願候ハ、当右不審をも生し、夫より事も挫け可申と申出候義ニ御座候、然ル処、右伊野右エ門殿着目候深美義も着キ候所一応之伺ニも不及直ニ御前江罷出、此度修理を御用ひ、殊ニ御殿山御願立之御一条全く修理奸謀邪術、御上を欺キ奉り私利を相ばかり候次第、以之外之義不届至極、右を取用ひ候主水も難相済私義を申上候ハ深美ハ不申聞、幾太<sup>タ</sup>承候義ニ御座候、此上修理を被遊御用而者御家中人心も相背キ決而御為ニ不相成候修理丈之義ハ斯申上候と深美<sup>タ</sup>申聞候義ニ御座候、一舛此度同人之策を被遊御用候も御上之御身を危く思召候所ニ附け込、御威し申上、邪術之所右様ニ無之、御遁方ハ猶幾斗も有之杯申上候処、御後悔至キ奴迎以後御用ひ無之趣ニ速ニ御決定相成申候、深美申聞候其節左様申、御上ハ御たまし易くと申聞候

但、態々其為に罷出申聞候義ニハ無之、以下二条目存念承り度と申候節罷越申聞候義ニ御座候、委細馬場弥三郎

書面深美対談之次第御照合御勘弁可被下候

(高田)

一右同人着後兩三日相過、幾太罷越、深美<sup>タ</sup>申上候様ニと申候ニハ無御座候へ共、此度伊野右エ門殿江御内願之御書面如形御仕散しニ而被成御遊候とハ以之外之義、其儘ハ難相済、然り迎御上之事ニ候へハ、御為無之共御諫言申上候ハ勿論之義ニ候へ共、御家老衆之義ハ懇意ニ被致候衆、格別一通りニ而内尋等無之ニ差出存念申述候ハ不敬之義被成御聞度候ハ、無覆茂可申候との様子ニ付、当人見込之所ヲ以被成御勘弁可然被遊候を其ま、被差置候ハ、是ハ甚申上兼候義乍ら無委細御手前様ハ御返人御役御免修理ハ御返人禁錮ニ而も可被仰付御内評之御様子ニも申聞候、旁御大切之義誠ニ其節勢ひ宜何と申事ニ候哉、喰付馬之様ニ相成り居り、咄も居合不申杯深切ニ申くれニ付、礼申

述、何卒存意承度旨深美江申通呉候様申候義ニ御座候

一深美右之趣承知ニ而罷越、着日御上江申上以後修理御取用無之而、二条目之次第申聞候付、何れニ致セ、御在所此表一致いたし、御上も右之所を能く御会得無之候而者取扱何分出来不申旨申述候処、此上修理御用ひ之義ハ決而不宜と碓と見極申候、志摩殿・伊野右エ門殿素より御同意之義、修理御用ひ之義ハ追々ニ不宜候、又可被成御用可被成と有之候而も、逆も海防御調之出来不申杯申義勿論無之、右者私罷在候内、御人数調懸一同評儀取調被仰渡候ハ、急度調出来可申旨、遮而強く申聞候付、右様御差支も無之事ニ候ヘハ宜敷又修理御用ひ之義、逆も一致ニ無之一人限ニ而御取扱出来不申旨、相答扱海防取扱御訴訟願之義ニ付而者存意も有之よし無覆臈申聞呉候様申述候処、寢前幾太々承り候通り逃候趣ニ而心得違之旨申聞候ニ付、決而左様之趣意ニ者無之、掛り御訴訟而已ニ而平然与可被勤居者哉、夫ハ被仰出候上之心得ニ而可有之杯前文ニも認置候通相答候上、元之一へ戻り着日申上候御殿山御願立一条心得違と自分江被申候ヘハ決而心得違とハ不存、何れ修理相尋存念為申述可申旨申述候処、御殿山之義何れ御組戻しニ不相成ハ成間敷候得共、其節之義伊野右エ門殿ニも彼是被仰候義ニも有之間敷と申聞候義ニ御座候、然ル上者、内願書ハ如何いたし可然やと承り候処、唯今申上候御運びニ参り候ヘハ、御取扱之御出来不被成と申ニも無之、其上以後者御在所江被仰遣候次第有無ニ候御人数早速被差出候様相成居候ハ、御差支も有之間敷候ヘハ、御願書ハ御貰戻し被成可然、右者伊野右エ門殿御不承知と有之候而も急度私引戻し差上可申と讀合呉候ニ付仕其意置候処、翌日歟從同人殿々返し呉候義ニ御座候

一六月廿三日修理御用ひ之義、御後悔ニ而以後被遊御用間布間、右之心得を以取扱候様別紙以御書下被仰出候、右ニ付尚又幾太罷越、御上ニ而如形被仰出候而も、主水殿出入ヲ被止候程ニ無之候而者、御安心も不被遊、御家中も不致安心候間、何もかも御為左様被致可然と深美申聞候、是も無位之義ニも候得者、時勢無撓事と申聞候付、尚深美

江内尋之上可取斗と御答置翌日に深美江修理江断くれ候様申所、私ニ而ハ廉立不宜、晴山(三村)可然もの事ニ付、同人江相頼候処、如何ニも無位之義事六ヶ敷撈撈ニ而も致と迷惑之趣、達而断候ニ付尚深美江申談候処、何れニも同人相頼候様、公事ハ私御引受申御差支無之様可取斗と申候ニ付、其段晴山江文通ニ及候次第ニ御座候、委細ハ修理差出候書類中三印之通ニ御座候

一 右前後同人軍議役御免、其外組戻し追々申渡、私及絶交候義、修理手順書之通相違無御座候

一 御願立御組戻御一条、伊野右エ門江罷越存念承り候処、何れニも被御立有之様御不覚之被仰立ニ候ひしと有之度と被申候ニ付、右ニ而ハ私承覆致し不申候、阿部様(正弘)御褒詞も有之修理之義、是非と御座候へハ修理相尋可及御評議と申述候処、再び右備へ被蒙仰サへ無之候へハ宜と被申候ニ付、転相尋可及御評議と申述、即相尋候所、右ニ不及旨別紙之通転申聞候義ニ御座候

一 絶交後修理方江相尋候義ハ失礼之様ニ候得共、何もかも御為筋ニ付、伊野右エ門殿、深美之形勢をも相咄穩当之所置之方追而之ため可然と申含度心得之処、不致会合候段も尤之義、其余岐次第と相成候義ニ御座候

一 修理諸御役人列席之所ニ而御目通申上、御国家之一大事申上度御目付江相伺候節、伊野右エ門殿ニ者差留候様ニ与有之私義ハ不苦与存候旨評儀居合兼候、其段当人へ為中断候次第ハ、馬場弥三郎書面之通ニ御座候、其後伊野右エ門殿修理義ニ付而者、志摩殿堅く御見込申談出府候義ニ有之、尚深美ハ可申聞と被申其上深美罷出、決而御目通為申上候而へ御為筋ニ不相成、見極有之由、右ハ伊野右エ門殿ニも同意之由申聞候、右等無位之差留ニ而自然御親類様御役家或者水府様等へ願出候杯も難斗旨相尋候処、億病者右様之義決而仕候申間敷、若願出候ハ、私罷出急度可致申披と申聞候、如何ニも不筋と存候得共、最初ニも相認置候通、右を遮而申張候ハ、素々暴の手筋ヲ以如何様ニ可申聞哉も難斗勢ひ、中々以私休勢ニ而ハ氣の支ゆべきに無之、如何ニモ此場ハ穩當ニ兩所之存念ニ任セ方、後

々組戻しの爲めニも可然と存極候、然ル所能々致再考候へハ一時の權と申候へハ、申候もの、仮初ニモ不公不正之筋ニ同意候義ハ有之間敷と逐日前非後悔慚愧至極ニ存し如何様被仰出候共、聊申上方無御座候、乍之伊野右エ門殿存念も可有之、志摩殿堅く被申談候由ニも有之、深美見極之次第も巨細ニ不承置候へハ、位を御糺有之度候委細修理前条御目通願、私手へ申聞候、時々評議、結極前紙深美下案并此上之取斗方有之旨申聞候次第上下印書面ニ而御承知御勘弁可被下候、修理軍議役御免後、御行列帳直し等之義、深美・幾太致主張取調候義ニ而御一同大小引替候義ハ此表有合御人数ニ而御人配り引足り不申之主意ニ而相伺候のミ、右修理承り込候様之義ハ勿論不申聞ニ重事ニ候得者、指揮不行届奉恐入候義ニ御座候、尚右兩人御尋御勘弁可被下候此表御人数云々之義ハ、転申立候ニ付而之、御用状中之幾太見込書面ニ而宜御勘弁可下候右条々中、深美所置心術如何ニも不公不正有有道之世ニ有之間敷義と漸々致了悟候へハ、於私奉恐入修理江対し候而も不本意至極之義と存、右絶交之義心得違之段相詫聞受呉候義ニ御座候、深美義万事其相談ニ准し候故ニも候歟、御側役之任ニ応し不申御爲ニも不相成之御趣意ヲ以兼帯之御側役御免被仰付者、乍憚至極御尤と罷在候処豈料らんや去月四日同人御用有之よしニ而、早速出府申渡候様御在所江可申遣旨、暮時前御書下ヲ以被仰出、暮時々再度御請御催促有之、早承一時ニ被遊御決度御様子ハ何如ニも奇怪之次第、正路之被仰出ニ無之義と奉察候と内評いたし明朝申上書と申上置即御受不申上候義之処御在所遠境ニ而ハ御急ぎ之義付、夜中成共罷出申上候ハ、可然との排説も有之由ニ候へ共、更ニ事札を不弁論ニ而別紙御側役書面之通兩人ニ而辞を尽し再応申上候而も御承引無之程之義、其御次第柄逆も罷出候而も御趣意伺候所之義ニ無之、唯斯意事を尽し候と後日之口実ニ致候迄詮無之ハ見透置候義、然ル上ハ同じ御承引無之乍らも同列ニ而礎と御直諫申上御承引無之よりハ自分御失値も薄く被為在候義と奉存候、斯事のもつれニ相成候故ニ、平常決而無之夜半之致出仕、可然など被申候共御役柄無用之事ニ礼格を可失筋無之、さりとハ常非無差別之論と存し申候、扱又如形人物如

斯被為召候へハ、候召時ニ御受不申上候も言外ニ御恕察可被下候

右之趣御答得御意候、尚貴意ニ不備候廉々御指摘可被下候

十月十日

#### IV

#### 御答書

(国家老)  
鎌原伊野右衛門

佐久間修理八丁堀様へ書類を以願立候義ニ付、存念之次第申立候様被仰下候付、左ニ及御答候、尤修理願書面之次第ニ寄り可相認順序ニも可有之候得共、主水殿答書ニ寄り相認候方簡便之義与存候付、右ニ因ミ相認候事ニ御座候一初条主水殿被認候通り、御人数御在所より早速不出次第ハ、同人殿存念書ニ添居候御用状之通りニ御座候、然ル処其節之御用番者舍人殿、主宰ハ志摩殿ニ御座候由候得共、第一其時出府之評議ニも相成候次第、於私御人数即時ニ不出義を素々十分と者不存候事ニ候得共、其節之衆議ニ随へ候義ニ而、其時私義一身ニ掛ケ断然と申出候ハ、仮令誰ニ如何申候とも、何とか出候次第ニも可相成を、夫丈ニ取計不申義全く私之不行届義と深く奉恐入候

一二条目、私へ長谷川深美申聞候も、主水殿被認候通り同様之趣意ニ御座候、尤御人数出遅滞ニ及候者、全く修理を用候故云々と御座候趣ハ、深美杯之意申ニ有之候事ニ而、矢張同人杯之口より発し候事とも被察候、且御上者御だまし易くと申事者、私へハ不申聞候

一三条目、私方へ深美罷越申聞候趣と主水殿へ幾太内々申立候ま、を同人殿被認候趣照し合見候ニ、勿論致符合居申候、尤主水殿内願書面者同人殿二条目ニ被認候通り私着日被差出候へ共、不容易事と存し預り置候処、翌日か深美

罷出、主水様ニも此度之事ニ付、海防御掛り御訴訟と申事幾太内々申聞、私へも御内願書御草稿御内々為御見被成下候処、何とも申上者不仕候か、誠ニ以御未練至極之事絶言語候次第ニ而、不被成御濟候義全く異国船ニ御恐れか様之事を被遊候と、外不被伺、在様之事ニ而ハ御掛り御訴訟ニ者無之御役か御勤か不被遊、誠以之外成義与奉存候、依而右者貴所様其儘御預り置御在所へ御持帰り御評議之上ニ而尚又貴所様御当府御座候而御同人様者御役御免被仰付ニ而可然と申聞候様候所、右者中々不容易事ニ付、其節有無之挨拶ニ者不及置候事ニ御座候

一四条目、主水殿被認候通りニ御座候、尤志摩殿・伊野エ右門殿素より御同意之義と申処者、御殿山御願立之義御在所衆議、乍恐江戸表御備立御調も陸々不附候所ニ而修理主張致しか様成御願立御座候事、表向之处ハ御立派之事ニ而御趣意も乍恐御尤ニも可有御座候得共、如何ニも不解義斯く御願立御座候上者、是非夫丈之御功績無之候而者不相濟候義之处、江戸表ニ而者如何様之御見込御座候而之事哉、何分急度御功績可相立事とも不被存、右よりハ公辺御指揮之儘ニ御從被遊、右ニ而何程も御勵御座候方御当然之義、然ルをか様成御場所等御好之御向不見様之御願御座候事者、如何ニも不審敷、右等之事を致主張候修理杯、此上如何様之無面目を仕出し申間敷も難斗、同人杯者決而御用へ有之間敷人物と菅沼九兵衛初申出、志摩初も右同意之事ニ付斯申出候事と存し、且主水殿内願書面之義ニ付而者、斯申候而者私何か身ニ不入、唯逃れ候様之次第ニ而恐入候得共、竝初同人殿書面預り置、誠ニ如何仕り可然哉と勘弁申、其後深美申聞候事者、尤以不容易ニ付、尚更勘弁申ニ而、深美計候趣余り無面目成様ニ存居候処、同人尚又罷出か様ニて成次第ニ付、主水様御内願書者私を以御貫返被遊度、尤御当人様より尚可被仰、近日義と申聞候付、兼而預り置候義、且存念も前文之次第ニ付早速了返と及挨拶入置候処、其翌朝於殿中主水殿其段咄有之、私御長屋へ参り可被頼と申事ニ付被參候を不待相返し候事と存候

一五条六条、其頃主水殿且深美より承り候通りニ御座候

一七条、主水殿被認候通りニ御座候、尤御願書御組戻しと申事者、四条目ニも認候通り、御在所衆議不承知之次第、且乍不行届私存候ニも、御殿山之辺御固ニ而必定大砲之功を成し可申と申見込無御座候、右見込無御座候而者、何分对公込奉恐入候事と存し申出候事ニ御座候

一八条、別段認候義無御座候

九条事實主水殿被認候通り相違無御座候、尤其内志摩殿堅く被見込申談云々と申所者、於同人者修理義ハ御国之疊と申者此疊を抜取不申候而ハ決而御国家者治り申間敷、然ル処是迄其機会無之此度者其機会ニ候旨被申聞、出府之も上度々内状ニ而唯此事而已厚く心得、深美と能々申談し可申、私深美兩人ハ此節望所ハ此一事ニ有之と被申越候事ニ御座候、右被見込候丈之処者、当夏同人志摩出府之上、修理御暇被下可然か、又者御在所勝手被仰付候方可然かと申義、段々主水殿へも内談有之候事と存候、扱修理義御目通り奉願、況して第一席初大小御役人立会之処ニ而御国家之御一大事を申上度段申立候を、指留候義者素より宜敷筋と者勿論不及候事ニ候得共、是迄之心得、衆人之申を承り候ニ、一体同人之為人、唯其上へ上へと申様ニ而夫より自由勝手之事而巳を申求而、人ニ逆へ且人ニ異成之事を仕り、其人体着服も先年之処ハ如何ニも異体ニ相見へ、其挙動驕慢之姿ニ而御在所御家中ニ而服し候人者数へ候様も無御座候、人ニ唯困り物と申成し、御目付等之申事をも氣ニ不入事をハ不相用、理を非ニ申なし、有る事を無と申様ニ而可致、登城節ニ不罷出等之事も儘有之、唯々礼義を不弁人と申様ニ而、乍恐実ハ御上(金目)之感応院様ニも御取扱被遊兼候旨も頼母(恩田)嘶ニも及承居候所、其内御暇願之一条相起り、御家中大半ハ唯胆を潰し数代世評君臣之恩義をも不弁人物と申唱へ候次第、如何ニも不解事と存居候処、其頃深美義、書物会説之中間ニ而懇意ニ致し置候か罷越候節、修理御暇願之事ハ以而開き候事、是をも評す可くハ何レをか不可評、尤以義理を搔払へ候事、人倫之尤大成者ニ而、席柄等ニ而決而其儘黙し居り可申事ニ無之旨、段々申聞候ニ付、成程と存、且志摩も同席且懇意事ニ

付内密申談之上、此義不可然旨認取、貴様江致持參候処、右者頼母殿へ差出候様ニと被仰下候付、同所へ持參、存念申述候処、其後如何相成り候事哉、右之事ハ相止ミ候事と存候、其後貴様御手ニ而五十ポンド玉之一条相起り、御家中唯々不平ニ存し候得共、其勢ニ屈し居候体、其外竹村金吾嘶ニも誠ニ困り拔候趣ニ而、逆も並方之事ニ而者取扱出来兼候旨、乍去、其芸能ニ於而者何ニよらず誠ニ拔群之事、如何ニも非常之方、唯々可惜、難用之人と存居候義、依而、私御役被仰付候砌りか、右等之義貴様へ御嘶申候処、右之処者尤候義、併し同人之事ハ中々不容易人、同列衆何レも手こずられ、逆も御法度を以而之始末ニ者不相成、私杯も数度被為困、夜中杯押掛候ニ者別而困り申候是ハ御上ニも前に同別物ニ被成置候事と被仰下候付、成程と存し、其上唯今御屋敷中ニも不居候人、別而別物と存居候事ニ御座候、然ル処、六月中異国船渡来之節、御内願書之義も前ヶ条ニ認候次第之趣ニ心得居り申義、扨御在所出立前ニも深美申聞候者、修理義者あの様成事を仕り以の外之事、切腹被仰付候而も可然杯申聞、且道中ニ而同人此表より罷歸り候者之嘶を承り候而申聞候ニ、御上修理を頻りニ被遊御用、乍恐御氣違之様ニ而成御座、猶同人者乍恐御上を御欺も申上、御側向ハ、勿論御家中一統不腹之義、剩へ御家中之者、不残修理へ入門被仰付候杯、皆同人之奸計より之事ニ而、逆も其儘ニ而者治り申聞敷、主水様ニ於而も不被成御濟り訳、勿論御退職之者者有之可申、是ニハ私義急度見居へ御座候事ニ付、断然と御断テ去り御座候ニと申聞候事、其後着府之上、乍恐御上之御様子も如何ニも御平常之御体ニも不被為入等之処、深美申聞候趣等考合候処、成程右ニも可有之哉と存候、其上同人御上へ申上候事も段々御座候様子ニ而、御上御様子も御替り被遊、且同人尚又申聞候も有之、勿論主水殿へ申立候事も有之ニ付、同人殿修理軍議役御免等之義、評議有之候事ハ、同人殿書面ニも有之候通りニ御座候、其後修理義御目通り之義、別紙主水殿被差添候書類之通り申立候処、前文之次第ニ而素より難用之人と存候、且前ニも認候通り志摩と者申談し置、其上出立後も度々内状ニ而被申越候事も有之、且又深美義ハ猶修理者二葉ニして不断ハ斧を用事



に至と申者故、決而為長候事ハ不相成、別而乍恐、御年若之君前杯へ者、片時も難差出旨、段々堅く申聞、且乍恐

(正弘)

阿部様へ御出御存念被仰立御聞受無御座時ニ者可被遊御刺違之、

(幸貫後室)

又者真月院様へ御云々の御書被進、又者御老若

様方へ之御配物御延引被遊度杯と申事ハ、何れも乍恐修理義何か申上候より出候事ニ可有之推察候事ニ候得共、急度左様と深美申聞候付而者、仮令御役人立会ニ而も弁口を以申上、自然又々御迷等被遊候様ニ而者不容易事と奉存候ニ付、素より指留候事者道理と者勿論不存、右へ掛合、誠ニ不得止之所置、全く其節權道之取斗、畢竟御為第一と心得致候義ニ御座候、然ル処、其後退而勘弁且三村晴山等段々申聞呉候趣、老合致熟慮候ニ、彼是伝聞ニ而承り誤り候故、心得違候事も有之可申且壅蔽ニ而唯悪く申成し候事も可有之、夫是心得違之義、全く深美を信じ候之不明之甚ニ而、斯く誤り候義、勿論大小御役人立合ニ而国家之御一大事を申上度段申立候を、指留候義者甚以無筋至極、決而有間敷心得違と深く奉恐入、後悔慚愧仕候、尚更御他家迄へも出候義、尤以申訳不相立事と奉存候一十條十一條、別段可申出義無御座候

右之趣ニ御座候、尚御不審之廉者被仰下度奉存候、以上

十月

鎌原伊野右衛門

V

口上覚

信濃守様重職被仰付置、専ら事を用ひ候者共党を結び、信濃守様御弱年を奉侮候歟、遂翁様御卒去以後、追々權

(幸教)

(幸貫)

威ニ募り我意を振ひ忠讜を忌ミ遠ざけ言路を壅蔽し御政事を玩弄同様ニ仕候のミならず、近来ニ至り候而ハ、信濃守様御承知も不被成候ニ、恣ニ御役人御役御免等取計らひ、又御役人を拵へ候等之跋扈ニ及び、其儘難被差置

勢御座候ニ付、夫是御在所御役人の内一人被召呼度段被御出候ても、其者出府致しおのれ等か罪惡露頭ニ及ひ候と考へ候へハ、奸人とも手を組ミ右御請仕らす候等の始末、言語道断之事ともニ付、無余儀此十五日茂右エ門(一場)へ内密御在所表立帰御用御手許ニ而被仰付候節も、御涕泣被成候て御憤御座候由、茂右エ門々承り不堪憤激義ニ御座候、茂右エ門義も昨日夜ニ入り帰府仕候所、直様其同役馬場弥三郎一同を徒目付三人ニて宅番致し候程ニ而、中々信濃守様へ御目通ニ而復命申上候次第ニ至らず、漸智斗を設け虎口を免れ修理方へ駈来り候仕合ニ御座候、昨夏遂翁様御卒去之上ニ、又去月真月院様御不幸有之、重ねくの御凶災ニて御年被召候御方と申ハ絶て無御座、唯御弱年の信濃守様御一人御孤立の姿ニて信濃守様御為を存候者をは尽く払ひつくし候様子ニて、何々危ミ奉存、且信濃守様御一分の御始末ニハつきかね候様被察候、此節ニ至り候てハ、御親類様方の御好ミを以、当太守様などへ奉内願候より外無御座存付、乍恐奉嘆願候義ニ御座候、実ニ容易ならざる義ニ付、御力を被為添、信濃守様と御相談被成下、夫々御吟味之上忠邪之分明白御弁別被成下、此上之所信濃守様御家ニ異事等不差起候様、此節御処置被成下置候様仕度奉願上候、此段可然御執成之程奉願候、以上

(嘉永六年)  
九月廿四日

(江戸目付)  
一場茂右エ門

## VI 佐久間修理願立一条御尋ニ付申上

御目付

(松平越中守)  
佐久間修理八丁堀様江願立候書面并右一任御書類共、御下御尋ニ付、評議仕候処、同人申立義尤候義ニ相聞附而主水殿御答書是又敬而無謂ニも無御座、異船渡来ニ付而ハ如形此表御人少故、早速御人数出無之ハ御心配御尤之御

儀ニ付、御指揮も相成兼候場を以、伊野右エ門殿御着後、海防御掛り御訴訟御内願書御指出有之候由候処、深美が奸計を以、幾太彼是申上、右者御貫尻罷成候由ニ候へ者、右を強而彼是申上候事ニ者無御座候へ共、乍去御在所御人数出早速無之ハ御不十分之義、既ニ再度之飛脚着之由及承候付、刑左エ門・友衛御様子柄為伺、夜半頃御用番江罷出候処、御殿山御内願被為立候由、申来候得共、是ハ御失策之様御評議、先此場ニ而ハ御人数出ニも及間敷、那奉行御勘定吟味等打寄衆議致一決候趣ニ而、寢早御引取ニも可罷成御場合ニて、猶御役人ハ申談様候被仰聞候得共、深美初御役人遮而此場ハ御人数出ニハ及間敷申居候事故、私共ニも其儘引取候所、再考仕候而ハ申立方も可有之候処、廉漏之段ハ奉恐入候、然ル所御書類等拜見、追々探索候得ハ、其根元ハ深美ハ出、第一志摩殿・伊野右エ門殿初修理御取用有之候而ハ御為不宜与御見込ハ軍議役御免御目通迄も御指留与罷成候御様子ニ而ハ、主水殿ニも無御余岐御場合茂相見へ、既ニ御国家上御大切之義ニ付、数度御目通願立を尽し申立候事故、御同人ニハ不苦儀御決断有之哉ニ候哉、伊野右エ門殿ハ御承伏無之故、御評議打合被急候而、伊野右エ門殿へ御引渡被成候御次第ハ、弥三郎申立書面ニ而相弁候、左候へハ、修理ニハ言路之壅蔽与申立候者尤ニて、御政事上御済被成兼候御儀与御再考有之、不公不正之筋ニ御同意有之段、前非御後悔当人江被对候而も不本意与御了語之上、詔御申述当人快心仕候義ニ候へハ、右一条斗ニ而ハ格別之義ニも及申間敷哉与奉存候へ共、過日御内尋之一条云々申上置候通、不容易御儀、御上ニも乍憚未タ御年も不被為積事故、以前様之御過失茂被為在、在中ニ者御一図之被仰出も可有御座候歟ハ不奉存候へ共、御旨ニ御違ひ御取斗も有之趣ニ而ハ、追々御不快ニ思召被為在候御中旁以無御余岐御張合ニ被為成、過急之被仰出も有之候事故与奉恐察候所、又主水殿・伊野右エ門殿ニハ御不筋而已被仰出、令内藏進・弥三郎等御荷胆申上、其形勢御正氣之事ニ無之与御見受、廿三日之御所置ニも及候事与推察仕候処、右者過日申上候通、其形勢見受不申候得共、当夜ニ限り不得止之義ハ如何ニも了語仕兼候、乍去、斯御着眼之上ハ、御伺無之御取

斗、敬而無故ニハ無之候得共、御上ニモ御氷解被為在、同役初不埒之廉無御座、只今与被成候而ハ、右之御所置者御濟被成兼候御義、右故令茂右エ門進も御他家迄罷出候義与奉存候へハ交御役御訴訟御尤之義与奉存候、然ル所過日申上候通、此度之一条ハ可成丈御寛仁ニ被成下度御儀ニ而異給一条之義も御座候得者御大事前之義、彼是御上ニも御舍凡百御寛泰与申段ニ者修理一条交、過日申上置候位ニ被仰出度御儀哉与奉有候

伊野右エ門殿御儀も過日申上置候得共、修理一条御書類篤与拝見仕候而ハ、右一件竊初々之次第柄、主水殿与ハ御差別も有之、深美申立を別而御信用故、修理御取用ハ御為不宜与之御見込ハ強而御目通願等御指留有之候段、主水殿之御ケ条ニ申上候通、御政事上御不正之御義与奉存候、尤平常彼是之挙動ハ御答書聊相違も無御座候、御家中信伏ハ勿論不仕候へ共、此一条ハ趣柄互ひ候義与奉存候所、彼是御熟考有之、先非御後悔ニて云々御答書有之候上ハ、是又御寛恕被為在、主水殿御同様被仰出候而御尤歟与奉存候

(河原)

一主水殿御答之中御在所々御人数出早速無之一条ニハ、事柄ハ違ひ候得共、舍人殿与匹敵候事云々、御尤之義ニ而、御内実ハ如何共御往復ハ舍人殿ニ御座候義、是以見越之申上方ニハ候得共、深美初遮而弁論御衆議之上、修理軍議役御免迄之御評議ニハ至り可申哉与奉存候へハ、御両所斯被仰出候段ニ者御差様位之義ニハ至り可申哉与奉存候一深美之義ハ過日も申上置候通、奸惡絶言語候次第共ニ御座候得者、御尋ニ而も可有御座御義哉、御不審之廉々厚御勘弁嚴重之被仰出有御座度御儀与奉存候、御尋当否如何可有御座哉、厚御勘弁可被成下候、御尋ニ付此段申上候、以上

十月廿三日

(小山田)

嘉永六癸丑年竜岐殿へ差出ス

御目付

## VII 御内密御尋ニ付申上

今般之御一件ニ付、主水殿・伊野右工門殿御役御訴訟被申上候由候処、右御一条ニ付、志摩殿ニ者当八日御役御免

(望月) (鎌原)

(真田)

被仰付候上ハ、此表御兩人様者如何之御様子柄ニ可有御座哉、得内密相伺候処、御内願御書類御内々御下竊ニ御尋ニ付、乍憚愚意申上候、先般伊野右工門殿急御出府々御在所表ニ而も御趣意柄不相弁事故、同役ハ勿論御家中一統不審仕、種々之疑説日ニ増上下怪居候中、茂右工門御内用ニ而、罷歸候々、別而衆人動揺仕居候折柄、兩人親類御預被仰付候段承知仕、不容易御義ニ奉存、御用番様其外様江も相伺候得共、委細御弁候も不被為在趣ニ付、何様之不埒御座候義哉与甚以恐入不審兼、其上茂右工門御内用筋ニ而御門出仕候者御門留も有之哉杯風聞仕、旁以下容易御所置与奉存、既ニ同役之内此表江罷出候様子柄奉伺度内評仕罷在候所、同人義八丁堀様江罷出候与之義相弁し候処、直様兩人急出府被仰付、着府迄も如何様之御義哉、御咎之程奉恐入甚心痛仕候処、早速御目通被仰付、荒々御様子奉伺誠ニ驚胆仕、乍恐御尤之御儀与奉伺候、尤御上ニも前以御過失等も被為在候御尤共申上兼候得共、其段ハ御云々御後悔も被為在候程之御義ニ而御案申上候々ハ如何ニも御隠当ニ奉伺、少数安心仕候、尚追々同役々委細承各様方江も相伺候而一件之御趣意漸相弁候而ハ御兩人御訴訟御尤之義ニ奉存候、然ル所、尚追々御目通御旨を伺候得者、次第御解被遊、殊ニ御仁恵を以志摩殿ニも別段御察当無之、四ツ時御役御免之義ニ付而ハ御兩人迎も御寛禧ニ御座有度御儀、尤根元ハ志摩殿、次ニハ主水殿、続而伊野右工門殿与甲乙ハ可有御座哉ニ奉存候、御兩人御同意之義ニ而も此表御詰御補佐之御任ニ候得者、於筋合而も伊野右工門殿之上ニ出可申、殊ニ廿三日夜之御所置者寸刻を争ひ候行勢不得止之御取計与ハ相伺候得共、其行勢見受不申事故、只管次第考合候而ハ御手前様御着之上御同様之御様体ニ思召候ハ、駈出し候か、又ハ何様之働可仕も難斗候得共、未タ御着否憤発可致謂有之間敷様奉存、其上茂右工門御屋敷内ニ忍居候哉之御掛念ニ而御家中御詮義等之義不穩御失策哉与奉存候、既ニ御在所ニ而も御預

(松平越中守)

之者共御詮義筋相分り候段被仰渡之趣承及、尚又不審仕、右様暫時ニ御了解被成候程之御儀ニハ御嚴重ニ過候御所置与一統申居候事ニ御座候、今程ハ勿論左様可申散義、当然ニ奉存候得共、凡而此一条御寛恕被為在候上ニ者御役候訴訟之義ハ御指留之上云々を以遠慮位者被仰付候方ニハ有御座間敷哉、左も無御座候而ハ、此上一統之治りも始終不宜様奉存候、前申上候通、此表ニ而御補導被為在候底ニ而ハ八丁堀様等へ御对被成候而も右位ニハ被仰出候方、却而御聞 も宜敷御締筋も相立候敷与奉存候、伊野右エ門殿ニハ式三人御同道ニ有之候共、御訴訟之廉ニ而御流被為在、御指留斗ニ而可然哉与奉存候、次ニ玄蕃殿御義ハ御勤柄斯迄ニ及候御様日々御側ニ而御伺有之、其儘ニ被指置候而ハ御役義御疎違之姿ニ相聞可申哉与奉存候へ者、平然与被居候而ハ如何可有御座哉、兼帶御役御訴訟被申上候方ニ可有御座候哉、右様之御決着ニ罷成候上ハ内蔵進<sup>(高山)</sup>進也右ニ被准可然哉与奉存候、此者竊初者御一旦之義無之様御留申上候哉ニも相聞候得共、思召被切候御様子ニ奉伺候ハ十分御勢力を添ひ老人ニ而御附添心苦仕候様子ニ相見ひ、忠義ニハ相叶ひ候得共、斯御解被遊候上、眼目ニ而評シ候而ハ御時節をも不弁御忌中ニも被為入候御中、如何様ニも取計方も可有之哉与存候へハ、乍忠義不行届廉も相見へ候得共、彼か生質ニ而中々解兼可申、右を強而御貴御座候而万一御尋等御座候ハ、定而種々可申立、折角御上ニも御解ケ被遊治り口出来掛り候所、又々跡戻り枝葉之論も浮ミ可申哉ニ掛念仕候得者、乍逆も御寛仁を以、聊之場ニ無御懸念御詮義筋相分り候趣ニ而、慎御免被成下茂八郎着府之上、寛々解聞セ当人ハ仰付恐入候旨申上候ハ、重疊之義与被成置候而ハ如何可有御座哉、尤御側役申立之次第も御座候ひ得者仲ケ間馴合も有之其儘ニ被指置候ニハ相成間敷哉ニ奉存候得者、暫御申含被置、彼是茂八郎ニ為御取扱御座候ハ、内蔵進を初同勤進も承伏可仕哉共奉存候、茂右エ門義ハ兼而申上候通廿三日夜之御次第故、不得止無余岐御他家江罷出候事、乍去御大法 相濟事ニ付云々被仰付、其罪余者滅し候義ニ付内蔵進等相片付候上ハ帰役被仰付候方与奉有候、旗之助義ハ御手許ハ御直命を受、其段申上出立仕候事ニ付、無余岐次第

御見捨ニて可然哉与奉存候、尤御用筋届兼候様ニも竊ニ承及候、万一名様之義ニ御座候ハ、御手許々之御察当者別段之義、彼是御含不及帰府位ニ而可然哉与奉存候、坊役両人之義ハ急場御用筋時之役頭々申渡相勤候事故、掟ニ違ひ送り等持参無之故、御普請方ニ而彼是申漸書面ニ而も差出候哉、帰府之節ハ御在所々送り持参候哉ニも承及候所、右ニ而者此表御普請方為相濟様子ニも相聞ひ、万一名様之論御座候ハ、無余岐ハ行違ひ之底ニて当人共差控候而も伺候ハ、相済可申哉、尤御手許々ハ御賞被成下候而御筋合敷与奉存候、茂右エ門召連候下目付義も同様平左エ門送り持参無之趣を以、彼是六ツケ敷申聞当人以之外難渋仕候由、右者普請奉行如何心得候哉、役義ニ付内密御用筋申付出向候者右様之及始末候而ハ御役義難立義ニ付、右者御含被置一件落着之上ハ平左エ門江急度御沙汰被成下度御儀哉与奉存候、差向此場ニ而之御取斗者右人別位之義敷与奉存候其余深美等ニ至り候而ハ篤与御勘弁御一統御座候方哉与奉存候、御内尋ニ付不顧憚り愚意認取申候、厚御賢慮被成下度此段申上被、以上

(嘉永六年)  
十月十六日

(原勝) 〔目付〕  
友 衛

## VIII

嘉永六丑十一月於江府小山田老岐殿江指出ス

長谷川深美等御答之儀御尋ニ付申上

御目付

長谷川深美一条御書類御下御尋ニ付評議仕候処、御書類篤与熟覽仕、猶追々御旨を奉伺候処々一ノ上印内蔵進江御尋之御文中之御趣意も被為在候哉ニ奉存、彼か茲邪絶言語、終ニハ御国政をも乱し候ニも至り候始末、不埒至極ニ付而ハ嚴重之御咎有之可然御義、既ニ修理杯律ニハ死ニ当り候哉ニ申居候由、明律一覽ハ仕候得共未熟ニ而右を弁

(佐久間)

(高山)

(目付、場)

解申立候義ニハ無御座候得共、罪条不容易義与者奉存候ヘ共、凡百右一件御糺明之上、夫々御咎筋御座候段ニハ、此表御両所様初彼ニ被御欺候逆、其儘ニハ相成間敷、執政之御任ニ者於道理上御役御差留候而之訳ニ者至る間敷、尤御訴訟御座候程之義ニ付、咎等勿論御厭候義ハ御座有間敷候得共、亦御両所様ヘ斗ニも無之、外一統江相聞キ不容易次第ニも至リ可申哉、第一御上ニも追々御氷解被遊此一条凡百御仁恵を以御答恕筋被加度難有思召ニも被伺候得者、可成丈ハ御寛養被成下度御儀ニ奉存候様所、同人之罪条ハ余事与違ひ忠孝之大義ニ拘リ候事ニ候得者、余リ御情ニ過候而ハ一統人氣動揺治リも如何可有御座哉、一統ニ而も委細不相弁候得共、此度之義ハ君臣御不和之義杯申散附而も同人杯之所置算ひ立、其内ニ者過去之事迄各一条々釀出、彼是不容易義杯申触、此落着如何相成哉与目を付ケ居候様ニ相聞候者、旁御寛仁之内ニも是等ハ少敷嚴重被仰付度哉ニ奉存候、左之趣様ニも可有御座哉

当人

其方義、当御役被仰付候以来、跋扈ニ從ひ、上を致輕蔑、刺御不忠孝之義等申上、感応院様迄之御德義を失し、御国政をも惑し候ニ至リ候拳動、不埒至極ニ思召、嚴重之御咎可被仰付候処、出極之御情ヲ以御役御宛行共被召上蟄居被仰付之

同人悴

父深美儀

被仰付候処、以御情其方江深美頂戴之御宛行金老枚三人御扶持被下置家督被仰付之

(真田)

先者、右様之趣ニも可有御座哉、斯取調候而再考候得者志摩殿等之義、其儘ニハ相済間敷、假令当人如何様之義申立候共、御取捨ハ御執政ニ有之候得者、一々尤と御聞請御取用有之故之事与仕候而者逼塞位之御咎無之ハ難相済哉



与奉存候、次ニ伊野右エ門殿ニ御座候得共、御書類之趣ニ而者全くハ志摩殿ヲ致発出、万事取斗候事与奉存段候与ハ有之様奉存候得共、退転位之義ハ可有御座候得共、眼目之志摩殿・深美斯被仰付候ハ、其余ハ過日申上置候通大事前之御儀、殊ニ御執政両三人退転杯与申候而ハ一々下之風評ニ罷成、第一御徳義ニ拘り候義ニ付、慎位之場ニ而御容恕御座候方与奉存候、又一統ニ而も斯迄之御咎ニ至り候ハ、格別、不被申述候者ハ有之間敷哉共奉存候、余ハ過日申上置候次第交御含被成下度奉存候、尤不容易一件之落着ニも御座候得共、何分治定之申立茂仕兼如何可有御座候哉、猶厚御勘弁可被成下候、御尋ニ付此段申上候、以上

十一月

御目付

〔付記〕これら一連の事件を通じて注目される二、三の点を付記する。

(1) 目付は監察的分野から藩政の枢機に接触しており、その具申意見が重要な比重を占めている点。

(2) 幼若凡庸な藩主時代に派閥による藩政の主導権争いが顕在化している点。「御国家之「大事」「君側の奸邪」「御上を欺キ」「御上ハ御だまし易く」等の語が飛び交い、専権私権が横行する。(派閥の性格説明が問題)。

(3) これらの事件の主役は中級藩士(百石程度)である点。重役らが彼等を利用してというより、むしろ彼等の言動によって藩政が動かされている観がある。

(4) 「忠孝之大義ニ拘り候事」「不容易一件」の責任者処罰が比較的寛大である点。重役らへの処罰は「御執政両三人退転杯与申候而ハ、一々下之風評ニ罷成、第一御徳義ニ拘り候義ニ付……御寛恕御座候方与奉存候」というかたちをとる。この事件以後、真田・恩田両派の政權交代は数次に及び、その都度の処罰は何れも短期間に解除されており、たらい廻しの観がある、「死の恐怖を前提とした恐怖政治」からはほど遠い印象をうける。

